

目 次

馬事資料

オリンピック馬術競技への日本の参加準備とその結果：

1964年東京大会……………池田 収……………1

馬事往来

浦河町における乗馬療育の取り組み

～介護予防としての高齢者乗馬～……………江刺 尚美……………14

輸血で活躍するユニバーサルドナー……………梶 裕永……………20

特別記事

歌志内から、世界へ

～ソメスサドルの挑戦～……………三浦 暁子……………24

日本ウマ科学会 2018 年臨床委員会

招待講演および講習会について……………井上 裕士ほか……………30

Journal of Equine Science Vol. 30 No. 2, June 2019 和文要約……………34

お知らせ……………36

協賛団体名・賛助会員名簿……………37

Hippophile 投稿に関する基準……………38

編集後記

Hippophile No. 77

- 編集委員 -

編集担当常任理事・編集委員長	楠瀬 良 (日本装蹄協会)	
編集委員	相川 貴志 (地方競馬全国協会)	関 正喜 (ジャーナリスト)
	荒川由紀子 (農林水産省)	永井富美子 (エディター)
	有吉 正徳 (朝日新聞社)	沼田 恭子 (NPO 法人引退馬協会)
	石田 信繁 (JRA 競走馬総合研究所)	古林 英一 (北海学園大学)
	北野あづさ (日本馬術連盟)	三浦 暁子 (エッセイスト)
	木村李花子 (東京農業大学)	守谷 久 (ジャーナリスト)
	近藤 誠司 (北海道大学)	山口 洋史 (全国乗馬倶楽部振興協会)
	末崎 真澄 (馬の博物館)	山下 大輔 (日本馬事協会)
	杉本 篤信 (地方競馬全国協会)	

表紙絵：騎手 (The Jockey): アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック (1864-1901) 1899 年 49.8×34.1 センチ多色刷り

リトグラフ 馬の博物館蔵

「騎手」は、晩年に近い療養中に一連のサーカスシリーズとともに表した作品である。ロートレックは、少年の頃に父親とともに乗馬をし、競馬場にもしばしば通った経験があり、晩年に再びその情景を思い巡らしている。後ろ姿の騎手は、あるいは馬と競馬を愛した父と自分の姿を映し出しているのかもしれない。

日本ウマ科学会

Japanese Society of Equine Science

○○○ 第 32 回学術集会の一般講演応募について ○○○

1. 演 題：ウマに関するものであれば、分野を問いません。原則として先着順に受付けます。
2. 演 者：1人1題。ただし会員に限ります。
3. 講演時間：発表は7分以内、討論は3分以内です。持ち時間（10分）を厳守してください。
4. 発 表：液晶プロジェクター1台（スライドサイズ4:3）およびPC（PowerPoint 2013: Windows 7）を準備します。円滑な進行のため、発表スライドを添付した電子メール（8 Mb程度まで添付可能）、インターネットによる大容量ファイルの無料送付サービスの利用、または発表スライドを保存した電子媒体（CD、USBメモリ等）を11月14日（木）までに下記学会事務局宛にご送付願います。
5. 講演の申込方法：7.の作成要領に従ってMS Wordで作成した講演要旨を下記学会事務局宛にご送付願います。

【学会事務局】

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴 1400-4 JRA 競走馬総合研究所内

Tel: 0285-39-7398 Fax: 0285-44-5676

e-mail: noishida@equinst.go.jp

学術集会担当：石田信繁（JRA 総研 企画調整室）

6. 講演の応募締切：2019年9月27日（金）（厳守）

7. 講演要旨作成要領

- 1) 講演要旨の作成には、書式の雛形（日本ウマ科学会 HP よりダウンロード）を使用してください。
（ファイル名の【○○】に演者名を入れてください）

2) 雛形の規格

(1) 用紙サイズ：A4 縦、横書き

(2) 余白：上下 20 mm、左右 20 mm

(3) 文字数・行数：本文は 28 行（タイトル、担当者、その下の空白行を含めて 33 行）

※講演要旨【雛形】の Word ファイルは、以下の設定になっております。

「ページレイアウト」－「ページ設定」－「文字数と行数の指定」－「行数だけを指定する」

(4) 文字の大きさ：演題名は MS ゴシック 13 ポイント

演者名は MS 明朝 Century 11 ポイント

所属名は MS 明朝 Century 10 ポイント（所属番号は上付き）

(5) 本文の字体：MS 明朝、英数字は Century 12 ポイント

ただし、【背景と目的】【材料と方法】【結果】【考察】などは MS ゴシック

(6) 文字揃え：演題名、講演者名、所属は中央揃え、本文は左揃え

3) 発表者の書き方

(1) 演者名の前には「○」 担当者間は「、」で区切る

(2) 名前の右上に所属番号を付し、番号に該当する所属を名前の下に記載

例) ○日本太郎¹、東京次郎²、大阪志郎³、福岡吾郎¹

¹日本ウマ研究所、²世界大学ウマ科学部

※所属が1ヶ所のみ場合は、右上の所属番号は表記しない。

4) 本文の書き方

- (1) 【背景と目的】【材料と方法】【結果】【考察】（後2者は【結果と考察】でも構わない）に分けてください。
症例報告やその他の場合については、これに限らず適宜工夫してください。

(2) Macintosh で作成した場合は、Windows で上記の規格に体裁を整えてください。

*氏名と、連絡先の住所、電話番号、メールアドレスを明記してください。

8. 優秀発表賞への応募

一般講演の中から、講演要旨により優秀発表賞候補講演を選抜し、最優秀発表賞ならびに優秀発表賞を審査して表彰します。応募を希望する方は、申込用紙に必要事項を記載し、講演要旨と一緒に提出してください。なお、優秀発表賞候補講演は、学術集会2日目（11月26日）の午前の時間帯に行われる予定ですので、この時間帯に発表できることが応募の条件となります。ご不明な点がございましたら、学術担当石田（0285-39-7398）までお問い合わせください。

（申込用紙は、HPよりダウンロードしてください。）

9. 第32回日本ウマ科学会学術集会について

会期：2019年11月25日（月）～11月26日（火）

会場：KFC Hall & Rooms（国際ファッションセンター）

*詳細は決まり次第、HP（jses.equinst.go.jp）に掲載致します。

（講演要旨書式の雛形）

1	演題名 （MS ゴチック Century 13 ポイント、中央揃え）
2	（1行あける、10ポイント）
3	○演者名 ¹ 、共同研究者 ² 、共同研究者○ MS 明朝 Century11 ポイント、中央揃え
4	¹ 所属1、 ² 所属2、○所属○ MS 明朝 Century10 ポイント、中央揃え
5	（1行あける、10ポイント）
6	【背景と目的】 （改行）
7	
8	余白は上下左右とも 20mm
9	本文 MS 明朝（英数字は Century）の 12 ポイント
10	本文 28 行（演題、演者名、所属、空白行含めて 33 行）
11	
12	
13	【材料と方法】 （改行）
14	
15	
16	
17	
18	
19	
20	【結果】 （改行）
21	
22	
23	
24	
25	
26	
27	【考察】 （改行）
28	
29	
30	
31	
32	
33	

日本ウマ科学会「認定馬臨床獣医師」認定のための 第1回認定試験のご案内

日本ウマ科学会は、我が国の馬臨床獣医師が備えるべき専門知識と臨床技術に関する最新の水準を明示し、馬臨床獣医師の質的レベルを一般社会に広く開示することを目的に、会則第3条5項に基づき、馬の臨床を専門とする獣医師の認定を行うことになりました。つきましては、下記の内容で試験を実施します。

1 試験の日時

2019年11月26日（火曜日）13:10-14:10（60分間）
第32回日本ウマ科学会学術集會に付帯して開催

2 試験の場所

KFC Hall & Rooms (Room 103, 10F)
〒130-0015 東京都墨田区横網（よこあみ）一丁目6番1号
（都営地下鉄大江戸線「両国駅」A1出入口より徒歩0分）

3 試験の種類等

(1) 試験の科目

試験科目は別に定める認定馬臨床獣医師モデル・コア・カリキュラム項目（Competences for VETCEE accredited equine programs）ならびに関連項目より出題する。

(2) 試験の出題数

試験は合計で50問とする。

(3) 試験の方法

多肢選択方式による。

4 受験資格

次の各号に示す条件をすべて満たした者について受験を認める。

- (1) 本会の会員であること
- (2) 馬専門の臨床獣医師として5年間以上の職歴を有すること

5 認定登録

認定試験に合格した者については、本会会長が認定証を交付し、認定馬臨床獣医師台帳に記載登録する。

6 認定の効力

認定は5年ごとに更新手続きを行わなければ、その効力を失う。

7 受験手続

(1) 提出書類等

- ア 受験申込み票
- イ 履歴書（研究歴を含む市販A4版、写真添付）
- ウ 受験料を所定の銀行口座に振り込み、その振込みを証明する書類のコピー

(2) 受験手数料

- ① 受験手数料は、10,000円とする。
- ② 提出書類等を受理した後は、受験手数料は返還しない。

(3) 振り込み先

みずほ銀行
山口支店（店番号643）
口座番号：（普通）3003142
名義：日本ウマ科学会臨床委員会

(4) 提出書類等の受付期間及び提出場所

- ① 提出書類等の受付期間は2019年9月1日（日曜日）から同年10月31日（木曜日）までとする。
- ② 提出書類等の受付場所は認定事務局 株式会社アイベック（〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-24-12）とする。2019年10月31日（木曜日）までの通信日付印のあるものに限り、受け付ける。

(5) 受験票の交付

受験票は、2019年11月15日（金曜日）までに送付する。この送付日を数日過ぎても受験票が届かなかったときは、認定事務局である株式会社アイベック（TEL：03-6822-9767（直通））まで連絡すること。

8 合格者の発表

試験の合格者には、2020年1月6日（月曜日）以降に認定証を郵送する。不合格者にはその旨を郵送にて通知する。

9 その他

- (1) やむを得ない事由が生じたときは、試験の場所若しくは期日を変更し、又は試験を中止することがある。その場合は、その旨を公示し、又は通知する。
- (2) 問い合わせ先：日本ウマ科学会認定馬臨床獣医師認定事務局
株式会社アイベック
〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-24-12
TEL：03-6822-9767, E-mail：okawa@ipecc2.jp

受験申込み票

日本ウマ科学会認定馬臨床獣医師認定試験 第1回：2019年受験申込み票		受付番号： (記入しないこと)	
日本ウマ科学会会員番号：		獣医師免許番号：	
ふりがな 氏名		男・女 本籍	生年月日 年 月 日 生 都・道・府・県
現住所等 (連絡先)	〒 Tel : E-mail :		
所属 (職名)			
最終学歴	年 月	大学	学科卒業
*馬臨床履歴 証明獣医師 氏名 (所属・役職)	馬臨床従事期間 年 月～ 年 月；学部在学期間除く 上記の従事期間に間違いのないことを証明します。 氏名： 印 所属： 役職： 証明者の獣医師免許番号： 認定馬臨床獣医師資格 (有・無)		
学位 博士号／修士号	博士 (年 月, 大学) 修士 (年 月, 大学)		
事務局使用欄	確認済／要照会		

注意：年月日はすべて西暦で記入，原寸コピーして使用のこと。

*馬臨床履歴の証明者は，すでに認定馬臨床獣医師の資格を取得した者に限られます。

馬事資料

オリンピック馬術競技への日本の 参加準備とその結果： 1964年東京大会



池田 収 (いけだ おさむ)

1941年3月佐賀県生まれ。1967年東京農工大学大学院農学研究科(修士課程)を修了、同年4月農林省(現農林水産省)入省(農業経済職)。本省各局庁、経済企画庁、国土庁等で勤務し1997年4月統計情報部企画調整課長を退職。関係団体勤務を経て2007年同法人の解散に伴い清算して現在に至る。学部生時代馬術部に所属。

池田 収

はじめに

昭和34(1959)年5月のIOC総会で第18回オリンピックの東京開催(1964年)が決定した。日本馬術界は、ローマ大会への参加準備と併行して東京大会開催への対応を開始した。東京オリンピック準備のための委員会は、35年11月以降審議検討を続け1年後に委員会を2つに分け、参加準備のための業務は強化委員会に、運営のための業務は準備委員会に、分けて活動することにした。

ここでは、強化委員会の参加準備を中心にみていくこととする。

1. 強化委員会の基本方針と指導体制

(1) 基本方針

強化委員会は、東京大会に向けた参加準備を重点的に進める必要から次の4項目を基本方針とし、委員会公報(『馬術情報』第111号1962年12/1月合併号)として周知させた。

- 各種目共フル・エントリーすることを原則にする。ただし、やむを得ざる場合は、大障害に重点を置く。
- 総合馬術競技用馬は、国産馬により準備することを原則とする。
- 馬場馬術用馬は、特別の場合の他は現有馬の調教を押し進める。
- 大障害では絶対入賞を期し、そのためには優秀な外国産馬を購入する。

(2) 指導体制

訓練方針に基づくコーチ陣には、ヘッドコーチに岩橋学氏(1936年ベルリン大会出場)、コーチに瀬理町芳雄氏と荒川米吉氏が任命された。その後昭和38

(1963)年12月8日の障害飛越最終予選会後の強化委員会(技術顧問遊佐幸平氏を含む)は、訓練監督に島津義孝氏、監督補佐に相川泰吉氏、マネージャーに須賀国晴氏、コーチ陣は従来どおり(岩橋ヘッドコーチ、瀬理町コーチ、荒川米吉コーチ)と大会に備え臨戦体制を組んだ。

2. 人馬の選考過程—昭和36(1961)年まで

(1) 第1次候補選手選抜予選会

候補選手は、全国より公募する方針を決めた。本審査会については、野村恵二氏が報告(『馬術情報』第108号)している。その要旨を紹介する。

第1次審査会は、昭和36(1961)年6月17～22日に亘り、種目毎に実施した。

〈審査申請書の提出者〉

障害飛越に32名(うち一般候補選手希望者1名)、総合馬術に39名(同4名)、馬場馬術に10名(同2名)が申し込んだ。準備委員会の予想を上回る申請者数に上り、期日と借上げ馬数の関係から一般候補選手希望者は書類選考のみで合格させた。

〈訓練候補生の選考〉

訓練候補選手の選考に先立ち、身体検査を実施し、障害飛越と総合競技希望者の合格体重基準を50kg以上(国際規定により選手の重量下限75kg(鞍を含む)を考慮)とした。

〈審査委員会〉

審査委員会は、島津(審査長)、相川、喜多井、山田、浜野の5氏で構成。また馬場馬術審査は、野村、牧田、瀬理町の3氏で行った。以下、候補生の敬称は略す。

①障害飛越候補選手選抜審査会

6月17～18日の2日間、馬事公苑において予選会

を開催した。

第1次（17日午前，部班運動等審査）：受験者28名を3班に分け，馬事公苑の馬10頭に騎乗し，号令による部班運動と低障害飛越を審査し8名が次へ進む。

第2次（17日午後，中障害飛越審査）：中障害（B）程度の障害13個配置，馬事公苑の貸与馬により馬群を編成，各々2回ずつ飛越，飛越技術等を審査し5名が次に進む。

第3次（18日，中障害飛越審査）：中障害飛越（A）程度なので，受験者の技量をうかがい知れるにたる馬匹としてエフォルジオ，富士，ケレル，慶隆，カツハヤの5頭を使用。

この累次の審査を経て，太田邦宏（専修大学OB，ストックホルム大会，ローマ大会出場），富沢康男（慶応大学OB）および永吉克己（明治大学学生）の3名を選出した。

②総合馬術候補選手選抜審査会

総合馬術は，6月17～20日の間，審査地を移動しつつ実施。審査員は，津軽，野村，浜野，山田，喜多井，川口の6氏で構成。

第1次（17日午後，部班運動等審査）：受験者23名を3班に分け，馬事公苑の馬に騎乗し，号令による部班運動と低障害飛越を審査し10名が次へ進む。

第2次（八王子牧場・関東競馬組合騎手教養所，19日，20日の2回）：岩橋ヘッドコーチ指揮の下，鎧無しの部班運動と小障害，走路騎乗1,400m，午後，障害飛越。同じメニューを2日続けて行い，6名が合格した。

第3次（21日，パレス乗馬クラブで馬術審査）：種目は乙種馬術。各2頭の馬で審査。

後日，訓練候補生を決定することとし，山岸照明（慶応大学OB）および松平正樹（成蹊大学学生）の2名を選出した。

③馬場馬術候補選手選抜審査会

馬場馬術は，6月21，22日の間，パレス乗馬クラブにおいて予選会を開催した。

21日午後，受験者5名に対し課目はサンジョルジュ賞競技，馬は各自2頭（パレスと宮内庁）で審査し2名を翌日に進ませた。22日，2名に対し運動課目は甲種馬場馬術，使用馬は，オーシャンパトロール（日馬連），松義（宮内庁），三光（パレス）の3頭で審査し，井上喜久子（聖心女子学院卒）および松平頼典（成城大学学生）の2名を選出した。



写真1. 総合馬術—耐久競技（2日目，南軽井沢）
千葉選手と真歌（第14障害，乾壕飛越）
出典『オリンピック東京大会馬術競技アルバム』（第一出版）

以上3種目の合格者7名は，訓練候補生として，日本馬術連盟の所有馬等を使用して，組織的な訓練を行うこととなった。また，7名以外の参加者は，一応「一般候補選手」の資格を与え，各自において訓練することとした。

(2) 候補指定馬の第2次審査会（12月）

基本方針に即し，候補選手の審査会とは別個に，候補指定馬の審査会を数次に亘って実施した。昭和36年8月，同12月，37年11月，38年6月，39年3月である。

ここで第2次審査会（36年12月2，3日，馬事公苑）の審査状況を野村恵二氏の報告（『馬術情報』第111号）により，その要旨を紹介したい。

第1次の指定馬は助成を受けている関係上，参加が義務付けられた。故障その他の理由で不参加もいた。審査申込みは，大学，乗馬クラブ，個人馬主からなされ，競技種目により審査内容を定め慎重に審査された。

①総合馬術候補指定馬審査会

審査会には11頭が参加した。審査員は，津軽，瀬理町，喜多井の3氏である。2日の調教審査では，丙種馬場馬術と馬体検査を実施した。その後の持久力審査は，A区とC区：速度240m/分で10km。B区：600m/分で距離1,600m，障害5個（高さ80cm，幅2m）。D区320m/分で，障害12個（高さ80cm，幅1.5m）。3日の障害飛越審査は10個（高さ1m，幅2m），水濠3mで審査された。その結果，成績上位5位まで馬体の精密検査を行い，朝風（朝岡氏），麗燕（丸善石油），



写真2. 大賞典馬場馬術競技（馬事公苑）井上選手と勝登
出典『オリンピック東京大会馬術競技アルバム』
（第一出版）

サターン（京大）、薫柳（山本氏）の4頭を指定馬とした。なお、馬名の後の括弧内は所有者である。以下同じ。

②馬場馬術候補指定馬審査会

審査会には6頭が参加した。審査員は牧田、野村、瀬理町の3氏で、乙種馬場馬術で審査した。出場馬のほとんどが限界の見えた馬であって可能性の問題となると、まず、1頭というのが審査員のいつわらざる心境であった、と記す。慶竜（慶応大）1頭のみが指定馬となった。

③大障碍飛越候補指定馬審査会

3日の審査会には13頭が参加した。大障碍飛越（2回飛越）は速度350 m／分、障碍12個、高さ1.3 m、幅1.6 m、水濠幅3 mで実施した。大障碍飛越審査は、垂直障碍を配置し、前後2回飛越経路を変えて飛越させた。口向きの良否が期待通りに示されたことは収穫であった。この段階においては調教進度表からみて、中障碍程度の要求でよいが、この段階ですら相当の過失を犯す馬が少なくなかったことは物足りない感がある。次回の審査会までにどれほどの進歩があり得るか、いささか心細いと記す。エイシー（川口氏）、ケレール（吉川氏）、飛燕（丸善石油）の3頭が指定馬となった。

3. 大障碍飛越競技，人馬の選考過程—昭和37（1962）年以降

(1) 第2次候補選手審査会で3名選定

昭和37（1962）年6月5、6の両日、世田谷の馬事公苑において、大障碍飛越と馬場馬術の第2次審査会を実施した（この日は総合馬術の審査は行わなかった）。

その合格者（前述の一般候補選手が対象）は、次のとおりである。

●障碍飛越：佐々信三（関西学院大学OB、丸善石油）、川口宏一（京都大学OB、ストックホルム大会出場）、法華津寛（慶応大学学生）の3名。

(2) 中後期—昭和37年後半から38年前半

その後、第3次、第4次、第5次と候補選手の審査会を実施し、その成績により訓練候補選手の一部入れ替えを行ったが、最終審査会が次のとおり行われるに及んで、最終候補選手は決定した。

〈第4次、5次障碍飛越の人馬審査会〉

昭和37（1962）年11月、馬事公苑において大障碍飛越の指定馬審査会が行われた。コースは国際級であったようだが、フェイス（彗星）、オーシャンパトロールというローマ大会用馬が失権したことに、その騎手を含め期待はずれになったようだ。飛燕とヴァリーナが指定馬となり、騎乗した佐々と法華津の2名が、引続き一般候補者となった。



写真3. 大賞典障碍飛越競技（メインスタジアム）
佐々選手と騎乗馬スネーフェル
出典『オリンピック東京大会馬術競技アルバム』（第一出版）

半年後、38年5月、馬事公苑で第5次障碍飛越候補人馬審査会が行われた。5名（訓練候補選手と一般候補選手）が参加し、荒木雄豪、佐々信三、永吉克己、法華津寛の4名が合格し、また飛燕とヴァリーナの2頭が継続して指定馬と決定した。

(3) 障碍飛越競技最終予選会

さらに半年後の昭和38（1963）年12月8日、障碍飛越最終審査が行われた。野村氏が記すところによると、2回走行で審査した。第1次走行を標準形式（4.5mの水濠を含む障碍14個、飛越回数17個）で行い、第2次走行はピュイサンス形式（障碍6個、飛越8回）で行った。オリンピックよりは一回り程度の低いものであった。

参加馬は国内一流馬のみであり、遊佐技術顧問が購入してきた馬のうち、スネーフエルは参加していないが濠洲馬3頭（ミスターミス、ウイスパー、コンキスタドル）のうち2頭が参加したほか、日本での国際スポーツ大会に参加したニュージーランドチームからの置き土産（検疫の関係上自国への再入国が難しいので日本国内で買取り）も2頭（ラロとサイクロン）参加し、好成績を収めた。

〈荒木候補、最終予選落ち〉

障碍飛越競技の候補選手は、法華津寛、永吉克己、佐々信三、佐藤伝一、影山祐三の5名。また、候補馬は、

スネーフエル、飛燕、サイクロン、ウイスパー、ミスターミス、富士、ラロ、ヴァリーナ、彗星の9頭である（表1）。

〈地方から審査選考に疑問の声も〉

昭和38（1964）年12月の障碍飛越や総合馬術の最終予選会が終了した後、須藤勇一氏が読売新聞に投稿した疑問に、野村恵二理事長が『馬術情報』（第124号、1964年1/2月号）に回答説明文を掲載した。母国開催のオリンピックに是非とも出場したい地方在住馬術家と中央との意思疎通の不十分さが露呈した形となった。

4. 馬場馬術競技、人馬の選考過程一昭和37（1962）年以降

(1) 馬場馬術選手と候補馬の審査

昭和37（1962）年6月5、6の両日、世田谷の馬事公苑において、大障碍飛越と馬場馬術の第2次審査会を実施したが、馬場馬術の合格者はなかった。

その後、37年11月21日馬事公苑で馬場馬術馬の調教審査（第4次）が中間馬場馬術種目で実施された。指定馬を目指す4頭とオープン参加4頭が参加した結果、最高点を獲得した浜千鳥（松平候補選手騎乗）1頭が指定馬となった。オープン参加の勝登（井上候補選手騎乗）も高得点を挙げ、今後の調教進展が期待された。

表1. 障碍飛越競技参加人馬最終予選会の成績（昭和38年12月8日）

出順	氏名	馬名	成績		得点	候補	
			第1次	第2次		人	候補馬
1	荒木雄豪	オーキット	-22.50	失			
2	法華津寛	ウイスパー	失	-20			○
3	永吉克己	富士	-24.50	-12	-36.50	○	○
4	佐々信三	飛燕	-24.25	-8	-32.25	○	○
5	大原岩雄	ヒュッシュ	-44.00	-29	-73.00		
6	佐藤伝一	サイクロン	-26.50	-8	-34.50	○	○
7	影山祐三	ラロ	-24.00	-20	-44.00	○	○
8	仲沢政雄	ロナルド	失	-20			
9	荒木雄豪	彗星	失	-12			○
10	法華津寛	ヴァリーナ	-36.75	-19	-55.75	○	○
11	永吉克己	ミスターミス	失	失			○

候補馬のうちスネーフエルは本予選会には出場していない。

資料：『馬術情報』（No. 123, 1963年11/12月号）

〈馬場馬術の最終審査を半年延期〉

馬場馬術競技参加人馬の最終予選会は、当初昭和38年12月8日とされていたが、馬匹の調教進捗が予定よりも遅れており、その後の調教の仕上がりへの悪影響なども考慮して、オリンピックで実施されるグランプリ種目を一律に課すことはせず、グランプリと中間馬場の両種目のいずれを選択するかは出場者に任せられた。その結果5名8馬のうちグランプリを選択したのは2馬にとどまり、6馬は中間馬場馬術を選んだ。

しかし、それさえも完璧に実施し得る馬がないことは甚だ心細い感じを抱かせた、という。この日5名8馬の審査をしたが、最終審査は来春に持ち越された。

訓練候補生は、井上、松平の2名（従来どおり）。一般候補生は、村上捷治、岡部長衡、瀬理町芳雄の3名。指定馬は勝登号のみ。

(2) 最終審査でチーム出場目指し3名決定

馬場馬術の最終審査は、昭和39年6月28日に実施した。本審査では、チーム競技が承認される見込みなので以下の3名を選定するが、万一チーム競技が認められない場合には、第3位の候補選手を代表選手にしないこととして候補選手の順位付けをし、第1位は井上喜久子、第2位は松平頼典、第3位は岡部長衡と決定した。また候補馬は勝登、ヴィクトリー、浜千鳥、青巴、祥雲、ライトスピリットの6頭を選定した（表2）。

この中で、異色の人馬が候補に選ばれた。岡部候補選手（大正2年生まれ。60歳）と自ら調教した青巴号である。『馬術情報』（第127号、1964年7/8月号）の表紙を飾り、「日本チームのメンバーに選ばれた同氏の春秋三年の成果は貧困なわが馬術界にあっては正に金牌に値するものであり、またわれわれはここに日本のホースマンのとるべき道標を発見した様に思われる」と激賞した。

5. 総合馬術競技、人馬の選考過程一昭和37（1962）年以降

(1) 人馬の審査会（37年10月）

総合馬術の第2次候補選手および第3次指定馬審査会は、昭和37（1962）年10月6、7日、青森県七戸町所在の農林省奥羽種畜牧場で実施された。データが不明瞭なところがあり、耐久力競技で失権または障碍飛越（2日目）不参加等があったのではないかと想像さ

れる。この成績と現在の選手層の少ない事情を勘案し、強化委員会は次の人馬を決定したという。

第2次候補選手として、荒木雄豪、佐藤伝一、千葉幹夫、前田陸利、本野善一の5名。

第3次指定馬として、アポロ、アバロンジュピター、藤竜、栄天の4頭。

(2) 総合馬術最終予選で候補人馬（7名5頭）を決定

1年後の昭和38（1963）12月8日に開催された強化委員会総会（2回目）において、同日開催された総合馬術の最終予選の結果につき報告された。

今後の計画について、岩橋ヘッドコーチより、「総合馬術は明年（オリンピック開催年）4月までは馬場馬術を主体とし、それに速度感覚の養成、障碍技功の研磨をする。馬場も少し遅れているし、障碍も今日の様子では程度も低いので、これも当初の計画に添うよう努力したい」と発言があった、という。

総合馬術候補選手は、千葉幹夫、佐藤伝一、本野善一、勝本正則、前田陸利、木曾敏彦、松平正樹の7名。また総合馬術候補馬は、真歌、栄天、朝風、ウネビヒカリ、日宝の5頭で、さらに準候補馬2頭（高嶋、コンキスタドル）を決定した。39年初めには高嶋と芳月が交替した。候補選手の配当馬は固まりつつあったが、馬の将来の損耗を気にかけての訓練だったという。

なお、木曾候補選手は、38年12月末日で候補選手を辞退した。

表2. 馬場馬術馬の仕上がり最終予選審査の成績（昭和39年6月）

順位	参加者氏名	馬名	得点	候補選手	候補馬
1	井上喜久子	勝 登	613	○	○
2	井上喜久子	ヴィクトリー	592		○
3	松平頼典	浜千鳥	508	○	○
4	岡部長衡	青 巴	497	○	○
5	松平頼典	祥 雲	486		○
6	瀬理町芳雄	ライトスピリット	478		○
7	荒木雄豪	フジハナ	414		
8	瀬理町芳雄	明 月	389		
9	下田恒祐	鉄 王	359		
10	村上捷治	ブラックキング	335		
11	平木茂子	ピーターパロ	326		

資料：『馬術情報』（No.127 1964年7/8月号）

〈大会直前に総合馬術選手4名、補欠選手1名を決定〉

総合馬術の選手は、昭和39（1964）年8月17日、訓練地のある青森県七戸町奥羽種畜牧場での選考で千葉幹夫、松平正樹、前田陸利、勝本正則の4名とし、補欠選手に佐藤伝一候補を決定した。その後、調整を続け9月28日、直接訓練地から軽井沢オリンピック村に入村、馬も同地の厩舎に入れた。

6. 基本方針に基づく候補指定馬の審査過程

(1) 5次に亘り候補指定馬を審査

候補指定馬の審査合格馬は、指定馬として毎月の飼養補助費7,000円／月頭が支給されたが、期待される能力に至らず成績が悪ければ指定を解かれることになる。指定馬は競技種目毎に指定され、指定期間は、昭和36年6月から39年3月まで実施された。この間、延べで障碍飛越馬7頭、馬場馬5頭、総合馬12頭が指定され、

38（1963）年初頃からは人馬の訓練調教基準が次第に高度になり、これに対応できない人馬は脱落淘汰を余儀なくされ、大学や乗馬クラブ繋養馬の多くは退場していく。国内から速やかに候補馬を発掘するという意図に対し、馬場馬の勝登（大会出場）、浜千鳥（大会出場）、総合馬の栄天（大会出場）等がオリンピック候補馬となり、指定馬制度は一定の役割を果たしたが、障碍馬では国産馬での対応が困難となり、アイルランド、濠洲、ニュージーランド産馬に依存せざるを得ないようになってきた。

(2) 候補生の訓練と候補馬の育成のための日馬連の保管馬

公募審査に合格した訓練候補生の計画的な訓練と定期的な予選会を行いつつ、候補馬の育成を図るため、日本馬術連盟自ら有望な候補馬予備馬匹を繋養してきた。昭和39（1964）年3月31日現在、繋養馬は16頭であった。このうち障碍馬は9頭（富士、彗星（フェーシー）、スネーフエル、ウイパー、ミスターミス、ヴァリーナ、ラロ、サイクロン、飛燕）で全てが外国産馬であり、ハンター8頭、アングロアラブ1頭（飛燕）であった。馬場馬は英国産のサラ1頭（ライトスピリット）のみ。総合馬6頭のうち内国産馬は5頭で、日宝と栄天はアングロアラブ、ウネビヒカリはサラ、真歌と朝風は半血種であった。また濠洲産馬のコンキスタドールはサラであった。

(3) オリンピック候補馬17頭を決定

東京オリンピック候補馬の最終審査会がオープンで実施された。大障碍用馬は、昭和38（1963）年12月8日（馬事公苑）候補馬6頭を決定した。また、馬場馬術用馬は、39（1964）年6月28日（馬事公苑）候補馬5頭を決定した。そして総合馬術用馬については、大会2ヵ月前の8月17日、訓練地の奥羽種畜牧場において5頭決定した（表3）。

7. 参加選手団の決定

候補選手の訓練は、候補選手になったときから次回審査会までの間、1期3週間に亘り数回、合宿訓練を実施、その経費は日本体育協会からの委託事業費の交付を受けた。

最も訓練施設を要する総合馬術については、千葉県中山競馬場白井分場（冬期）と青森県七戸町の農林省奥羽種畜牧場（5～10月）が使用され、大障碍飛越と馬場馬術の訓練はほとんどが馬事公苑を使用した。また、訓練の過程で候補指定馬は変更（解除または追加）された。

昭和39（1964）年8月30日、馬事公苑で開催された日本馬術連盟理事会は、東京オリンピック馬術競技選手団を次のとおり決定した。日本のオリンピック馬術競技参加史上、唯一のフルメンバーでの選手団となった。

監督：相川泰吉、助監督：須賀国晴

馬場馬術競技選手：井上喜久子、松平頼典、岡部長衡

障碍飛越競技選手：佐々信三、法華津寛、影山祐三

総合馬術競技選手：千葉幹夫、前田陸利、松平正樹、

勝本正則、補欠選手佐藤伝一

団体獣医：妹尾敏彦、以上の他、馬取り扱い人7名

出場馬匹等：参加馬（15頭）と出場馬（10頭）は、表3に記載。

8. 競技の概要と経過

(1) 総合馬術競技

日程：10月16～17日馬場馬術競技、18日耐久力競技、19日障碍飛越競技。

参加人員と参加馬匹：参加12カ国、各国4名の選手を準備したので48名が参加。馬は羽田空港または横浜埠頭から寄り道せず一路馬運車で同地の厩舎に搬入。

競技の開催場所と施設：南軽井沢地藏ヶ原の荒蕪地

表3. 東京オリンピック候補馬（17頭）、参加馬（15頭）および出場馬（10頭）

競技種目	馬名	所属	年齢	性	体高 cm	種類	産地	参加馬	出場馬
大障害用馬6頭	ウイスパー	日馬連	13	騾	164	ハンター	濠州	○	
	ミスターミス	日体協	10	騾	161	ハンター	濠州	○	
	ラロ	平馬氏	10	騾		ハンター	ニュージーランド	○	○
	スネーフエル	日馬連	9	騾	165*	ハンター	アイルランド	○	○
	飛燕	和田氏	8	牝		アングロアラブ	濠州	○	
	トキノアラシ	馬事公苑	8	騾		サラブレッド	内国産	○	○
馬場馬術用馬6頭	勝登	荒川氏		騾		アングロアラブ	内国産	○	○
	ヴィクトリー				小柄	アラ系	内国産	候補馬辞退	
	浜千鳥	松平氏				サラブレッド	内国産	○	○
	祥雲	馬事公苑				サラブレッド	内国産	○	
	青巴	岡部氏	8	牡		サラブレッド	内国産	○	○
	ライトスピリット	日馬連	7	騾	162	サラブレッド	英国		
総合馬術用馬5頭	真歌		6	騾		半血	北海道	○	○
	日宝	日馬連	10	騾	158	アングロアラブ	北海道	○	○
	島雪					サラブレッド	内国産	○	
	栄天	神戸乗馬	8	牡		アングロアラブ	内国産	○	○
	芳月	黒河氏				サラブレッド	内国産	○	○

* 遊佐氏目測。資料：『馬術情報』（各号）等より筆者作成。

を中心に実施（標高約 900 m）。

〈第1次—馬場馬術競技〉

所要時間 7 分 30 秒，課題運動を満点 138 点として減点法式で採点。相川監督によれば，「日本選手の演技は…概して馬の収縮を求めすぎ，歩様短切であって運動課目は相当正確に行われたにもかかわらず，満足な得点を得られなかったことは残念であった。総合馬術競技の馬場馬術に対する見解にわれわれ指導者に誤りがあった」と述べている。また，「日本の馬匹は…小柄で見劣りがしたことは確かで，小格馬はやはり体力的にも限界があるようで，後日の生地騎乗でこの弱点を暴露してしまった」と報告書に記載した。

〈第2次—耐久競技〉

耐久競技は，1924 年パリ大会で確立され 20 世紀中はそれほど大きな変更はなかった。主催国は，当該オリンピック大会の競技規則の範囲内で工夫を凝らしたコースデザインをしてきた。このため主催国によっては障碍の形状，配置を難しくし問題になることもあった。

軽井沢のコースは，5 区に分けられ，総距離 32.7 km / 111 分である。

A 区：6 km の道路と小径 25 分

B 区：3.6 km のスチープルチェース 6 分（ただし早着 5 分 13 秒までなら 37.5 の増点）

C 区：13.92 km の道路騎乗（ぬかる細道や山の登降） 58 分

D 区：7.2 km の原野（固定障碍 31 個） 16 分

E 区：1.98 km の駈歩平坦地行進 6 分

相川監督の報告によれば，「外国選手または国際馬術連盟の技術顧問もやや難関に乏しいと感じたらしい。事実，競技当日は不運にも終日降雨の悪コンディションであったにもかかわらず，この D 区にて失権になりたる者出場 48 名中僅か 9 名を数えたのみ」，「確かにかつてのオリンピックにおけるコースより比較的平易であったに違いない。むしろ「雨天が幸いしてより難しくなってよかった」と国際馬術連盟の人が言われたと聞く」と。

また国際馬術連盟（FEI）History Hub においても，本大会のクロスカントリーコースはオリンピックの基準からみて簡単だと批判された，とコメントしている。

〈日本選手の競技経過〉

相川監督は持場の関係上 D 区（クロスカントリー）の競技はほとんど見ることはできなかったが、日本の 4 選手中 3 選手がこの区間で失権したことは全く予想外だったという。「わずかに千葉選手の真歌号が全経路を悪戦苦闘しながら走行し得た」と（表 4）。

〈個人、団体共にイタリアが優勝〉

優勝は伊のケコリ選手と Surbean（サラ）、銀メダルはアルゼンチンのモラトリオ選手 Chalan（サラ交配 50%）、銅メダルは独のリッゲス選手と Donkosak（不詳）であり、また団体の順位は、伊、米、独であり、日本の団体成立は果たせなかった。

〈日本の総合競技の敗因〉

何故このような結果に終わったのかを監督は省みる。長文なので要旨の紹介になるが、第 1 に訓練の不十分さを挙げる。例えば、

●選手選定の最終予選では、本番コースの 60% 程度の距離と障害はほぼ同程度のものを造り完走した馬匹を合格としオリンピック出場させた。

●日本で準備した馬は、当初は相当いたが、訓練に耐えられず、または障害事故により廃馬もいて、最後は 5、6 頭を残すのみとなった。

●最終予選でさえ、馬の不測の損廃を恐れ、やや要求を低めて実施した。

●常に（オリンピック級の）競技会を開催し、勝ち抜いた馬匹を出すことが肝要。

●クロスカントリーを訓練する施設が乏しく軽井沢の施設さえ使える目算がない。

●失権時の馬匹の状況について、2、3 前の障害あたりから変調しはじめ、失権した障害では全く飛越意志を喪失していた。馬匹の体力・気力が疲労のため消耗していた。

(2) 大賞典馬場馬術競技

日程：10 月 22、23 日、世田谷の馬事公苑芝馬場において競技は実施。

参加国・選手数：参加国は 9 カ国（チームは 6 カ国）、選手総数は 22 名。2 日目の 2 次審査は上位 6 名で行われた。

〈日本選手の競技〉

相川監督の報告によると、競技当日、「2 番出場の松平君はやはり馬が拍車に抵抗し、運動中しばしば後肢を蹴り上げる動作をし、これでは調教競技の基本たる扶助に従順という点から大減点は止むなしで、平素よりむしろ不成績というべき」（21 位）と評した。また、「井上夫人の勝登号は人馬共練習時を凌ぐ出来ばえで、かつ最高の出来であったと認める。しかし先にも述べた如く、馬の歩様の悪さは如何せん。結局 16 位にランクされたのは残念至極である。しかしこの成績はかつて日本人が示した最高のものと思う。パッサージュ、ピアッフェ等 6 点以上の得点を得ていたことは立派である」「勝登は日本の馬匹の中で、最も調教が完成している馬で運動の正確度という点から申せば相当のものであるが、如何せん歩様が悪く、本競技において歩様の得点 2 点（10 点満点）ということは他馬に全くなき点数であった」と。岡部選手が騎乗する青巴について

表 4. 総合馬術競技の上位者と日本選手の成績

順位	選手名	国名	馬名	馬場競技	耐久競技	障害競技	総合計
1 金	ケコリ	イタリア	Surbean	-54.00	+118.4	0	64.40
2 銀	モラトリオ	アルゼンチン	Chalan	-42.00	+98.4	0	56.40
3 銅	リッゲス	ドイツ	Donkosak	-32.00	+91.2	-10	49.20
4	M. ページ	米 国	Grasshopper	-43.00	+90.4	0	47.40
5	キャメロン	アイルランド	Black Salmon	-70.67	+117.2	0	46.53
6	ホルスト	ドイツ	Condora	-49.00	+95.6	-10	36.60
34	千葉幹夫	日 本	真 歌	-63.67	-174.8	-30	-268.47
—	勝本正則	日 本	栄 天	-72.00	第 21 障害失権	—	失権
—	前田隆利	日 本	芳 月	-76.00	第 3 障害失権	—	失権
—	松平正樹	日 本	日 宝	-73.33	第 23 障害失権	—	失権

は、「青巴号は岡部君の調教した馬でサラブレッドの良血種であるが、馬の活気乏しく、歩様の伸展も十分ならず、いずれにしても苦戦は免れずと予想された」としている。競技当日について印南清氏は「沈静を欠き日頃の能力が発揮されなかった」と評した。19位であった。

〈個人はスイスのシャンマルタン、団体は独が金〉

1日目審査の上位6選手は、翌日の2次審査に進んだ。2次審査の結果、優勝はスイスのシャンマルタン (Woermann, トラケーネン♂), 2位は独のボルト (Remus, WEST 騾), 3位はソ連のフィラトフ (Absent, アハルテケ♂) だった (表5)。

また、団体 (3名) の結果は、1位ドイツ 2,558.0, 2位スイス 2,526.0, 3位ソ連 2,311.0, 4位米国 2,130.0, 5位スウェーデン 2,068.0, 6位日本 1,779.5 であった。

(3) 大賞典飛越馬術競技

日程：10月24日、最終日の国立競技場において競技は実施され、午前と午後の2回走行で競われた。

参加国・選手数：参加国は17カ国 (チームは14カ国), 選手総数46名。

〈日本選手の競技成績〉

相川監督の報告は苦渋に満ち、「日本もこの種目に最も期待をかけ、ローマ大会後、良馬の入手、調教、選手の養成に全力を挙げてきた。最も期待し得る馬はスネーフエル号 (アイルランド産ハンター) で、欧州で優秀な成績を挙げたものを購入した」しかし「スネー

フェルは騎乗が難しく、日本到着以来、本来の能力を最高に発揮することがほとんどなかった」「この馬匹は佐々選手に割当て出場せしめたが、やはり拒否、落下等を数回繰り返し、成績振るわなかった」と。

次に、「影山選手は日本馬「トキノアラシ」号で出場と定めた。この馬はサラブレッド種で、やや落ち着きを欠く点はあるが、練習の最終期には飛越も確実度を加え、高さ幅にも十分な能力を備えているので、相当いけると思い出場させたが、結果は2回共途中拒否を重ね失格のうき目見た」。

さらに、「法華津選手の出場馬を決定するにはやや苦心があった」。濠洲産馬のウイスパー、和田氏所有の濠洲馬の飛燕、平馬氏所有のニュージーランド産馬のラロの3頭の中から法華津選手と話合っテラロ騎乗に決めたという。結果は、「選手もやや上がり気味であった様に見受けられたが、落下過失続出し、これまた期待より程遠き成績」「最も期待をかけた大障害にも惨たる成績で、監督として申訳なき限り」と。

〈仏のドリオラ、2度目の金〉

個人優勝のドリオラ (Lutteur B, 仏半血) は、1952年ヘルシンキ大会 (Ali Baba, アア) から12年を経て2度目の金メダルを獲得した (表6)。

また、団体成績は独、仏、伊の順位であった。日本チームは、1936年ベルリン大会団体6位入賞以来の団体成立を期したが残念ながら果たせなかった。

〈コースデザイナーである城戸俊三氏を高く評価〉

FEIのHistory Hubでは、大障害飛越競技のコースは

表5. グランプリ馬場馬術競技の上位者と日本選手の成績

順位	選手名	国名	馬名	種類	得点	再審	総計
1	アンリー・シャンマルタン	スイス	Woermann	TRA	870.0	634.0	1,504.0
2	ハリー・ボルト	ドイツ	Remus	WEST	889.0	614.0	1,503.0
3	セルゲイ・フィラトフ	ソ連	Absent	アハルテケ	847.0	639.0	1,486.0
4	グスタフ・フィッシャー	スイス	Wald	SWB	854.0	631.0	1,485.0
5	ジョセフ・ネッカーマン	ドイツ	Antoinette	HOL	832.0	597.0	1,429.0
6	ライナー・クリムケ	ドイツ	Dux	HAN	837.0	567.0	1,404.0
16	井上喜久子	日本	勝登	アア	648.0	-	648.0
19	岡部長衛	日本	青巴	サラ	589.5	-	589.5
21	松平頼典	日本	浜千鳥	サラ	542.0	-	542.0

馬の種類：TRA (トラケーネン, ドイツ中間種), WEST (ウエストファーリアン, ドイツ中間種), アハルテケ (Akhhal-Teke), SWB (スウェーデン温血種), HOL (ホルスタイン, ドイツ中間種), HAN (ハノーバー, ドイツ中間種), アア (アングロアラブ), サラ (サラブレッド)。

表 6. グランプリ障碍飛越競技の上位者と日本選手の成績（総参加選手 46 名）

順位	選手名	国名	馬名	種類	第1走行	第2走行	減点総計
1	P. ドリオラ	フランス	Lutteur B	仏半血	-9.00	0	-9.00
2	H. シュリッド	ドイツ	Dozent II	ハノーバー	-12.50	-1.25	-13.75
3	P. D. ロブソン	英国	Firecrest	不詳	-8.00	-8.00	-16.00
4	T. J. フェーイ	濠洲	Bonvale	濠半血	-8.00	-8.00	-16.00
5	D. シルヴァ	ポルトガル	Jeune France	半血	-8.00	-12.00	-20.00
5	N. ベッソア F	ブラジル	Huipil	半血	-12.00	-8.00	-20.00
38	佐々信三	日本	スネーフェル	ハンター	-46.75	-24.00	-70.75
41	法華津寛	日本	ラロ	ハンター	-63.75	-48.00	-111.75
43	影山祐三	日本	トキノアラシ	サラ	-86.25	-71.25	-157.50 失権

3位と4位は同店だったため、ジャンプオフを実施し順位を決めた。
資料：『オリンピック東京大会馬術競技アルバム』、FEI History Hub

難しいがフェアなものだったと評価し、1928年、1932年の両大会に出場した城戸氏が事前に何度も欧州の競技会を訪れデザインしたものであり、距離780mに14障碍17飛越が配置され、最終の障碍(1.45×1.50×1.85m)がすごく(major)、その前に幅5mの水濠障碍があり、左回りに最終障碍に向かうコースだった、と紹介している。

事実、46選手の全2回走行中1回目は減点0が皆無、第2回走行で金メダリストのドリオラ(仏)と銀メダリストのシュリッド(独)の2人だけが障碍減点0(シュリッド選手はタイム減点が1.25ある)という結果だった。

結び—7大会のオリンピック馬術競技参加で見えてくるもの

(1) 準自前主義

日本のオリンピック馬術競技参加は、戦前3回、戦後復興期3回を経て1964年東京大会を迎えた。現代からみると半世紀以上も前の時代の参加準備である。

東京大会までの馬術競技参加準備を大きく特徴付けるものは、競技参加準備のほぼ全てが日本人の手になるもの(準自前主義)といえる。すなわち、人馬の選定、訓練調教計画と実施過程の全て、競技馬の健康管理・獣医療行為、東京大会の競技施設に至るまでの全ての競技・訓練施設の建設と維持管理、コースデザインを含む競技運営に至るまでの全てを自前で賄おうとしたことである。例外はある。一部の競技馬、とりわけ大障碍馬のほとんどは欧州温血種(ハンター、アングロ

ノルマン)と濠サラ等に依存したことである。

準自前主義を可能としたのは、この時期までのオリンピック参加準備が実質的に騎兵出身の馬術家が主導したからである。戦後日本の馬術チームの監督、コーチ、トレーナーは、次第に学生馬術(民間)出身者に交替していくが、これらの民間馬術家の多くは戦前、軍馬で馬術教育を受けていたため、意思疎通に大きな問題はなかったようにみえる。

このような準自前主義は、今では信じられないことかもしれないが、新鮮に感じる読者も多いのではなかろうか。

(2) 内国産競技馬の供給源の衰退

遊佐幸平氏(写真4)が「オリンピックと日本馬」(『馬術情報』第94号)で述べているところによると、戦前の軍部は、主に4つの方途で競技馬(大障碍馬を含む)を全国から収集できたという。すなわち、

- 国内全2歳馬セリ市場の最優秀馬を毎年20頭、騎兵学校特種(殊)用馬として厳選購入
- 国立種馬牧場生産のサラブレッドと種馬育成の種馬不適格馬の保管転換
- 下総御料牧場からの優良純血系馬の下賜
- 日本乗馬協会(日本馬術連盟の前身)から、ダービー優勝級馬や中山大障碍優勝馬など代表的国産優駿の提供、である。

なお、この他、騎兵学校は毎年15頭、濠洲産新馬を補充した(遊佐幸平『馬狂放談』)という。

これに対し戦後は、競走馬と農耕等使役馬以外に生

産がなく、国産競技馬の選択幅が著しく狭まった、と遊佐氏はいう。ちなみに農林水産省の統計でみると全国の馬匹繋養頭数は昭和10(1935)年頃までは140～150万頭で推移してきたが、大戦で軍馬が消耗した20(1945)年の112万頭から35(1960)年には67万頭、40(1965)年32万頭、45(1970)年11万頭(うち軽種馬5.2万頭、日本軽種馬協会調べ)と激減していく。

軍用補充馬、農耕馬、その他使役馬等の半血種の馬は減少するに任せ、乗用馬としての能力向上を図る育種の試みは、少なくとも組織的にはみられなかった。

(3) 内国産馬の競技成績

〈馬場馬術競技〉

初参加の1928年アムステルダム大会では、純馬術(馬場馬術)に2頭の内国産馬で臨んだが、馬場馬としては小格馬で歩様や調教の不十分さを露呈したようだ。その後も、軍部首脳が無理解、短期調教による演目未完という弊害、戦後の派遣経費の制約等もあって馬場馬術競技参加は実現されなかったのだが、オリンピック開催国として36年振りに1964年東京大会では団体要件に必要な3名を出場させた。団体成績は6位であるが、個人成績は伸びなかった。

遊佐氏は、戦前からドイツの例を挙げて馬場馬術の調教には6年程度の期間が必要と度々発言してきた。馬場馬術の得意な印南清少佐らのロサンゼルス大会、ベルリン両大会参加を望んだが果たせなかった。その後遺症とも思えるのだが大障害や総合馬術を優先するあまり、馬場向き優駿の計画的な調達と調教がなされず、東京大会も民間(個人)任せにしたことが不振の一端になったと思う。

〈総合馬術競技〉

総合馬術競技は、1912年に始まり1924年パリ大会で競技形式が確立されたのだが、2日目耐久審査の総距離は36kmを基準(東京大会は32.7km)とした。馬術強豪国は、陸軍の威信をかけて総合馬術競技を重視した。自国の軍馬であることが出場条件であった。

初参加の1928年ストックホルム大会では城戸俊三少佐(久軍、濠サラ)が参加し、46名中21位(持久力審査の成績は4位)で国内調教馬の面目を保った。次の大会では国産馬での参加が期待された。1932年ロサンゼルス大会では山本盛重大尉が(錦郷、ギドラン種、内国産)で完走し14名中7位と健闘した。1936年ベ



写真4. 昭和41(1966)年の遊佐幸平氏
この年の11月25日逝去された。83歳。
出典『遊佐馬術』(恒星社厚生閣1998年版)

ルリン大会では、西竹一大尉は、総合馬術と大障害の2競技に出場したが、総合馬術(アスコット、内サラ)では50名中12位であった。この大会の持久力審査4区(クロスカントリー)はトリッキーでアンフェアとの評判がつきまとうのだが、9位で走破し国産馬の能力を示し得た。

戦後は派遣経費の制約で実現せず、28年後の自国東京大会で4名が国産馬で出場した。しかし完走は千葉幹夫選手騎乗の真歌のみ(48名中34位)で3名は失権した。主として競走馬(軽種)からの転用等で賄われたが訓練中の故障、能力不足等から十分に馬を補充することができず選手のトレーニングにも影響したのではないと思われる。

〈大障害飛越競技〉

1928年アムステルダム大会から1964年東京大会までの7大会に出場した大障害馬(予備馬を含む)20頭(2大会出場馬も1頭とする)について、日本が調教完成までに関与した度合いを3段階に分けてみてみたい。A:レディメイド・タイプ(既調教の外国産馬。出場または予備馬)―13頭

このタイプは最も多く戦前3大会では4頭(うち2頭は故障で未出場)であった。最も良い成績は1936年大会で岩橋学大尉騎乗のファーレーズ(英ハンター)

が54名中14位であり、団体戦は18団体中6位となる。戦後は4大会で9頭（うち4頭は予備馬または不調で未出場）である。最も成績の良かった人馬は1960年ローマ大会で太田邦宏選手騎乗のフェーシー（ハンター）が69名中29位であった。

B：折衷タイプ

（国内調教の外国産馬。出場または予備馬）—5頭

このタイプは戦前4頭、戦後1頭である。前述のように戦前は騎兵学校が毎年15頭の濠洲産新馬を補充していたというが、総合馬と大障害馬に調教してオリンピックに出場させた。ウラヌス（仏産アングロノルマン）を含めたのは、イタリア騎兵将校がもてあましていた馬を、留学中の今村安少佐が西中尉（当時）に奨め、同人が自費で取得し仕上げた馬だからである。1932年ロサンゼルス大会で優勝、1936年ベルリン大会では加齢で54名中20位、団体6位であった。

戦後の1頭は、富士（NZ産ハンター）で、1956年ヘルシンキ大会で川口宏一選手が66名中26位、1960年ローマ大会では荒木雄豪選手が団体戦のみ出場して完走した。

C：完全自前タイプ

（国産馬を調教し出場または予備馬）—2頭

このタイプの1頭は1936年ベルリン大会の予備馬の苑楽（未出場のサラ）。もう1頭は1964年東京大会で影山祐三選手騎乗のトキノアラシ（サラ）であるが、残念ながら完走できなかった（表7）。

(4) 大障害競技馬の調教—2人の馬術家の見方

〈遊佐幸平氏の視点〉

遊佐氏は、先の「オリンピックと日本馬」において、中山大障害優勝馬級の競走馬（カブト、ニュージャパン、キンテキ、アサミネ）を調教したが、大障害競技馬にはならなかった。英国のグラントナショナル（リバプール）、パリ大障害競馬（オートユ）出走馬からオリンピック大障害飛越競技に出場したのは皆無と聞いたという。

一方、名もなき競走馬で、国際障碍飛越競技で活躍した馬として、英国バット・スマイス嬢のプリンスハルを挙げる。体験家の言として、サラブレッドは幅跳びにはいいが、垂直には本来不向きにできている。例外はあるが、現在の高さと同幅を伴うヴォリュームのある大障害には、サラブレッドは通常不得手の種類上の特徴がある。世界的な名飛越馬の血統を洗うと、ほとんど純血量の多量な半血種である、と指摘する。そ

表7. 日本選手騎乗のオリンピック大障害競技馬20頭（予備馬を含む）1928-1964

期間（1928-1964）		馬匹名（大会年次／成績、品種）
A：レディメイド・タイプ 既調教の外国産馬13頭	戦前4頭	・アイリッシュボーイ（愛蘭土）（1928、1932共に負傷で未出場、ハンター） ・ゾンネボーイ（1932／失権、ハンター） ・ファーレーズ（1932／跛行未出場、1936／14位、団体6位 ハンター） ・ダンシングダイナ（1932／跛行未出場、伊サラ）
	戦後9頭	・ユリスB（1952／45位、アングロノルマン） ・エフォルジオ（1956／31位、1960／失権、ハンター） ・フェーシー（1960／29位、ハンター） ・オーシャンパトロール（1960／不調未出場、濠ハンター） ・スネーフエル（1964／38位、ハンター） ・ラロ（1964／41位、NZハンター） ・ウイスパー（1964／予備馬、濠ハンター） ・飛燕（1964／予備馬、濠アングロアラブ） ・ミスターミス（1964／予備馬、濠ハンター）
B：折衷タイプ 国内調教の外国産馬5頭	戦前4頭	・久山（1928／経路違反失権、濠サラ） ・ウラヌス（1932／優勝、1936／20位、団体6位 アングロノルマン） ・久軍（1932／予備馬、濠サラ）（注） ・朝富士（1936／35位、団体6位、濠サラ）
	戦後1頭	・富士（1956／26位、1960／団体戦完走、団体組めず／14位、NZ産ハンター）
C：完全自前タイプ 国産調教馬2頭	戦前1頭	・苑楽（1936、予備馬・未出場、サラ）
	戦後1頭	・トキノアラシ（1964／失権、サラ）

（注）久軍は、1928年大会で総合競技21位、1932年大会では大障害予備馬であったが城戸選手の総合馬が予備馬を含め故障したため、急遽、転用して総合に出場し失権した。

して、「要するに、敗戦前後を通じ30数年にわたり国産馬をもってする大障碍馬の養成には実に真剣の努力を払うに^{やぶさ}なかつたが、成功の謎には今なお頭を左右に振らざるを得ないのはまことに遺憾である。殊に優良な半血乗用系馬の生産のない現在では一層そうである」と。

そこで、遊佐氏は、オリンピック用大障碍馬としてハンター種を中心に購入してきた。

〈川口宏一氏の視点〉

川口氏は、戦前からの学生馬術出身で1956年ストックホルム大会の大障碍飛越競技に出場し、その後も長きにわたり日本の障碍馬術を指導し見守ってきた。同氏は、戦後日本が参加したオリンピック大障碍競技に日本人が手づくりした馬とその調教者を列挙(『馬術情報』第303号)しているが、その中で1952年ヘルシンキ大会から1964年東京大会までに日本人が調教した大障碍競技参加馬は、わずかに「富士(武宮氏, ニュージーランド), トキノアラシ(木村氏, 内国産)」の2頭としている。武宮氏とはアバロン乗馬学校を創設した武宮正旺氏^{まさお}, 木村氏は馬事公苑教官の木村善衛氏であろう。

川口氏は、戦後においてはレディメイド馬が多く、国内調教馬の不振に危機感を抱いている様子がみてとれる。前掲表7からみても、戦前は未調教の若い濠サラ等を輸入し、それをオリンピック競技馬に調教し、かなりの成果を収めたところだが、戦後は、そうした調教能力自体の低下傾向を懸念してきたのだ。

以上のように両馬術家は、大障碍飛越競技を念頭に置きつつ特に戦後の国産馬の能力と我が国馬術家の調教能力を問うているのである。

主要参考文献・情報

1. Edward, E.H. 2014. 新アルティメイトブック馬(楠瀬 良 監訳) 緑書房, 東京.
2. 相川泰吉. 馬術競技, オリンピック報告書, 第18回(1964, 東京), (日本体育協会, 1965)(国会図書館デジタルコレクション).
3. オリンピック東京大会馬術競技アルバム. 第一出版, 1966年.
4. 野村恵二. オリンピック東京大会馬術競技第一次候補選手選抜審査会, 馬術情報, 第108号, 1961年6/7月号.
5. 野村恵二. オリンピック馬術競技参加指定馬第二次審査会概観, 馬術情報, 第111号, 1962年1/2月号.
6. 強化委員会総会議事録, 馬術情報, 第125号, 1964年3/4月号.
7. 遊佐幸平. オリンピックと日本馬, 馬術情報, 第94号, 1959年10/11月号.
8. 川口宏一. '86全日本障害選手権を通じて日本スポーツ馬術の原点に立つ, 馬術情報, 第303号, 1987年1月号(以上の外, 『馬術情報』関連記事(月刊各号)多数(日本馬術連盟保管図書))
9. 遊佐幸平. 馬狂放談, 那須書店, 1958年12月.
10. 遊佐幸平著, 荒木雄豪・高津彦太郎編. 遊佐馬術, 恒星社厚生閣, 1998年.
11. FEI History Hub : <https://history.fei.org/node/>
12. The Sport Horse Show and Breed Database : <http://sporthorsedata.com/>

馬事往来

浦河町における乗馬療育の取り組み ～介護予防としての高齢者乗馬～

江刺尚美



江刺尚美 (えさし なおみ)

高校時代に馬術部で障がい児の乗馬に出会い、社会福祉士の資格を取得。平成15年より乗馬療育インストラクターとして浦河町の乗馬療育に携っている。平成29年にさらなる乗馬療育の発展のため、NPO法人ピスカリを設立し代表理事を務める。地域に根ざした乗馬療育事業を行うとともに、誰もが笑顔で暮らせる地域社会作りを目指し活動している。

浦河町における乗馬療育の歴史

近年日本国内において、馬が人の健康や福祉へ寄与する活動が注目されてきている中で、馬の町浦河町での乗馬療育もこの10年ほどで活動内容が広がってきており、様々な変化があった。

私が北海道浦河町での乗馬療育に関わり始めて15年ほどが経とうとしているが、その間、障がい児・者のみならず高齢者に対する介護予防のための乗馬や、乗馬の効果の科学的な検証など様々な取り組みを行い、発信するなどの努力をしてきたことが少しずつ実を結んできているように感じている。

浦河町において障がい者の乗馬が初めて行われたのは、1992年の記録が最も古いとされている。本格的に取り組み始めたのは、1996年に社会福祉法人わらしべ会が乗馬療育をより良い環境で専門的に行うために、身体障害者療護施設（現在の障がい者支援施設）を開設した頃からである。当初は施設利用者のみを対象と

したものであった。

その後、1998年にわらしべ会が乗馬療育に関する人材育成のために「日本乗馬療育インストラクター養成学校」を開校し、同時に障がい児の乗馬療育を浦河町から受託し、提供を開始した。同校は2006年に閉校したが、105名もの卒業生を送り出した。閉校後には「わらしべ乗馬療育研修センター」としてこれまでの乗馬療育を引き継ぎ、新たに高齢者の介護予防のための乗馬を始めた。わらしべ会の乗馬療育の事業縮小に伴い、2015年4月からは一般財団法人ホースコミュニティに浦河町の乗馬療育が委託された。しかし、これは私たちが地域に根差した団体を立ち上げるまでの救済措置であったため、中心となって乗馬療育を行っていたメンバーで2017年12月に「特定非営利活動法人ピスカリ」を設立し、2018年4月より浦河町の乗馬療育事業を引き継ぐこととなった。

このように、一時は衰退の危機に面した浦河町の乗馬療育であるが、町内・外の多くの方々に支えられながら、これまでの経験と実績を基盤として活動を継続できる体制作りを行っている。まだ発足して間もない団体であるが、より地域に根差した活動と乗馬療育の普及のために、馬の可能性と浦河町の資源を活かした事業を展開し、誰もが笑い合える居場所作りを目指している。

〈乗馬療育とは?〉

浦河町における乗馬療育は、心身に障がいがある方や何らかのサポートが必要な方に対して行われる、馬を介在した活動である。馬に接しふれあうことや、馬に乗る機会を提供し、楽しみながら能力を伸ばす、社会参加を促すことなどを目的としている。

「療育」とは治療・教育・保育を併せ持った言葉で、



体操なども取り入れる

主に子どもを対象とした言葉であるが、浦河町における乗馬療育は子どもから高齢者まで、幅広い年齢層を対象としている。また、身体障がいや知的障がい、精神障がいなど利用者の障がいも幅広く、様々な方を受け入れている。

乗馬の際には1人ひとりの身体状態や精神状態、興味関心やその時々課題などを考慮しながら、馬や馬具の選定を行い、目的を設定して内容を決定する。その内容は手綱操作や速歩といった騎乗スキルの向上の他、馬の上に立ったり後ろ向きに乗ったりする軽乗や、馬に乗りながら楽しみながらゲーム感覚で数や色、ルールの学習を行っている。例えば輪投げや的あて、パズルなどその内容は利用者に合わせて多岐にわたる。私の経験上、特に障がい児・者は「成功体験」が少ないと感じているため、チャレンジすることなどを通し、「できた！」という喜びと達成感を味わう機会を増やすことに重きを置いている。

成功体験を増やすことで自信が付き、徐々に乗馬以外の生活場面でも変化が出てきていると嬉しそうに話してくれる保護者も多い。実際に乗馬に通うようになって驚くほど集中力が付き、他者とのコミュニケーションが上達したなどの声を聴くと、私はこの仕事に就いて良かったと思うと同時に、とてもやりがいを感じている。

乗馬療育を行うにあたっては、当たり前だが馬の存在が不可欠である。当法人では小さなポニーからサラブレッドまで様々な品種の馬たちが活躍している。



馬とのふれあいで笑顔があふれる



隣の牧場で馬の数を数えながら…

より安全で、より効果的な乗馬療育を提供するためには、用いる馬も心身ともに健康である必要がある。そのため、私たちは「幸せな馬が人を幸せにする」ということを念頭に、できるだけストレスを減らした環境で馬を飼育するよう心がけている。馬に対する福祉の考えがなくては、馬との信頼関係を結ぶことができず、実践活動を行うことはできない。馬も生きているので、1頭1頭、個性がある。それぞれの馬の性格を理解したうえで、心身共に無理をさせ過ぎないように活動を続けることが、利用者である乗り手にも大きなメリットにつながる。

また当法人では、馬を熟知しているスタッフの他、社会福祉士である私を筆頭に理学療法士、作業療法士など福祉・医療スタッフが常駐して乗馬療育に携わっており、国内でも他に類を見ないほど専門家が揃っている。そのような専門スタッフが1人ひとりに合わせて話し合い、様々な工夫をしながら乗馬療育を提供している。

乗馬がどのように心身に影響をもたらすかについても、外部の専門機関や大学などと連携し、科学的に効果検証を行っていることも当法人の特徴の1つだ。

今回は当法人の活動の中から、12年前から行っている高齢者を対象とした介護予防のための乗馬について、効果検証の結果を交えて紹介する。

高齢者のための乗馬

〈介護予防のための乗馬のはじまり〉

浦河町における高齢者のための乗馬は、2006年に「高齢者体力アップ推進事業（健康乗馬事業）」として

表 1. 介護予防のための乗馬利用者

	浦河町介護予防センター (高齢者乗馬)	うらかわ健康道場 (まきば道場)
対象者	要介護認定を受けていない65歳以上 方で、予防支援が必要な浦河町介護 予防センターに通所する高齢者	要介護認定を受けていない60歳以上 の方で、浦河町在住の高齢者
平均年齢	86歳	72歳
利用料	750円/1日 (送迎・食事サービスなども含む)	200円/年間 (レクリエーション保険料として)
頻度	月に3回程度 期間：4月～11月(8月は除く)	年間2コース 1コース各3回
乗馬時間	15～20分	

開始した。当時、日本国内においては超高齢社会の到来に向け、国民が生涯にわたり活動的に生活できる「明るく活力ある社会」の構築を目指し、2005年から2014年までの10年間で『介護予防10カ年戦略』として、様々な介護予防のための取り組みが行われはじめた。

浦河町では1998年より、障がい児に対して行われる乗馬療育を福祉サービスと位置付け、浦河町児童デイサービスセンターの療育の1つとして行っており、乗馬が健康の維持・増進に役立つことを既に認めていた。このことから、高齢者を対象とした介護予防においても、乗馬が取り入れられることとなった。

実際の事業を行うにあたり、事前準備として2回の高齢者の体験乗馬会を実施し、参加者の感想などを参考に介護予防や安全確保のため、浦河町保健福祉課と検討を重ね、翌年から乗馬回数などを増やし「高齢者乗馬」事業として継続して開始することとなった。

当時、私が所属して浦河町内の障がい児・者のための乗馬療育を担っていた社会福祉法人わらしべ会わらしべ乗馬療育研修センターに浦河町が事業を委託し、浦河町営の乗馬公園協力の下、高齢者のための乗馬を提供していたが、現在は当法人が事業を引き継いでいる。

〈対象者〉

高齢者乗馬の対象者は、浦河町役場と乗馬公園などと共に何度か話し合いを重ね、浦河町介護予防センターに通所している方に決定した。

浦河町介護予防センターは地域の介護予防の拠点であり、65歳以上の高齢者を対象に個々の身体状況に合わせ、転倒予防や認知症予防などの介護予防事業を実

施している町営の施設である。通所の対象者は介護認定を受けていない高齢者で、様々な介護予防プログラムと送迎・昼食・入浴サービスを受けることができ、すべてのサービスを含めて1日の利用料は一律750円となっている。

介護予防のためのプログラムの内容は、絵手紙やコーラスなどの各種教室や、プール、太極拳などの取り組みを行っており、定期的に体力測定を行いながら健康維持を図っている。このプログラムの中の1つに乗馬が取り入れられた。

利用者の中には高齢者乗馬を始めた当初から2018年現在まで、12年間継続して乗馬を続けている方もおられる。高齢者乗馬を始めた当時は、利用者の平均年齢は78歳であったが、現在の平均年齢は86歳に達しており、最高年齢96歳の方まで乗馬を楽しんでいる。このことから、日本の高齢化が進んでいることもあるが、要介護認定を受けずに元気に通所している方が増えており、乗馬が浦河町における高齢者の健康寿命の延伸に寄与しているのではないかと感じている。

また、高齢者乗馬を提供するようになって数年後、介護予防センター利用対象外の方からの乗馬希望も高まった。そこで、浦河町内に在住する60歳以上の方を対象とした健康づくり事業「うらかわ健康道場」の中でも、2013年から「まきば道場」として乗馬が取り入れられた(表1)。

〈安全確保〉

高齢者の乗馬においては、できる限りの安全対策を行っている。介護予防のための乗馬なのに、万が一にでも怪我をして介護が必要になるようなことがあって

はいけない。そのため、事前に既往歴を確認することにより疾患等を把握し、無理がないように配慮している。例えば、骨粗鬆症や脊椎の疾患など、高齢者には見た目だけでは判断できない症状も多く、乗馬をすることによって身体症状が悪化する可能性がある疾患の方もいる。既往歴によっては、主治医からの乗馬の可否の判断を仰ぐ場合もある。

また、体調確認として、体調の聞き取りのみではなく、乗馬前後に血圧と脈拍の測定を行っている。こうしたバイタルチェックを行うことにより、1人ひとり、乗馬前は乗馬が可能かを判断し、乗馬後には疲れの度合い等の確認を行うことができる。

高齢者の中には「馬に乗りたいたから」と、体調不良を隠して来られる方もいる。過去には、いつも血圧が安定しているのに、その日は何度測っても血圧が高く「今日の乗馬はやめましょう」と伝えると、「実は午前中に一瞬、意識がなくなって…。馬に乗りたいたから隠して来たの。やっぱり駄目だったか…」と話された方がいた。その方はその後も大事に至らず、元気に過ごされているが、もし乗馬中に意識がなくなるといことがあれば、大事になっていたかもしれない。血圧を測っていて、本当に良かったと感じた出来事だった。

バイタルチェック以外にも、乗馬の際にはヘルメットとプロテクターを着用し、1名の騎乗者に対して馬を引くリーダー、乗り手をサポートするサイドウォーカー2名の計3名が付いて、安全を確保しながら行うこととしている。また、乗り手個々の姿勢の確認や、

全体を把握して指示を出す役割として、インストラクターがその場をまとめている。

1回の乗馬会につき10名ほどの利用者が来るため、3頭の馬を用意してグループで乗馬をしている。当法人スタッフと乗馬公園スタッフだけでは人員不足のため、ボランティアにも来てもらっている。定期的にボランティア講習会等も開催し、安全確保のためのボランティアのスキルアップも行うようにしている。

また、環境面においてもスロープ付きの乗馬台を設置し、乗馬する際にはスロープで台の上まで行き、馬の背中に安定して跨ることができるようにしている。下馬に関しては、馬が突然動いて台と馬に挟まれないよう、地面に直接おりている。

〈配慮点〉

先にも述べているが、高齢者の乗馬は何よりも「安全」が一番大事であると考え。普段の高齢者乗馬で配慮している点は、下記の通りである。

- ・骨粗鬆症の方などは特に脊椎圧迫骨折の危険性が高いため、乗馬・下馬の際はゆっくりと行う。
- ・股関節の関節可動域に制限がある方の乗馬・下馬は痛みがないよう、様々な工夫をする。
- ・皮膚が薄く、擦れる可能性がある方に対しては、鞍の上にクッション性のあるシートセーバーを敷く。
- ・安定してスムーズな柔らかい歩行ができる馬を使用すると、リラックスして乗馬できる。
- ・自己申告や本人の自覚症状以外の体調確認のため、



高齢者乗馬開始当初



当初は手綱操作も行っていた



会話を楽しみながら

乗馬前後にバイタルチェックを行う。

- ・馬の手前を意識して、無意識に身体バランスを整え、姿勢の安定につなげる。
- ・疲れない程度の乗馬時間にする（翌日に疲れを残さない）。

〈内容〉

開始当初は馬上体操をはじめ、横木通過や手綱操作、常歩中の歩度の変化など様々な内容を行い、いかに飽きさせないかを重点に行っていた。しかし、乗馬を続けていると「乗馬の次の日は疲れが残っていて寝ていた」「お尻の皮がむけて、しばらくお風呂が痛かった」などの声が聞かれるようになった。つまり、乗馬している間は夢中になって楽しんでいるが、乗馬後に大きな負担があることがわかってきた。

そこで、いかに安全に負担なく乗馬を楽しんでもらえるかを話し合い、試行錯誤しながら乗馬内容の再検討を重ねていった。

現在では、バイタルチェック等で疲労度を確認しながら、ゆったりとした常歩でサイドウォーカーとお話を楽しむような内容に変えている。当初は、「今日は何をするの?」「手綱を持って1人で乗りたい」「走ってみたい」などの声が聞かれたが、常歩で馬に乗るだけでもしっかりと運動になること、その中でも姿勢がとでも良くなっていることなど、身体的な進歩を伝えていくことで、徐々にゆったりとした乗馬も受け入れられるようになった。また、乗馬前後の効果測定をフィードバックすることも、モチベーションを上げる要素の1つになっている。



乗馬後のふれあい

乗馬後に馬とふれあうことも楽しみにされており、中には引きこもりがちであったが、馬にあげるために畑でにんじんを作るようになった方もいる。

乗馬の効果

乗馬の主な効果として、身体的効果・心理的効果・社会的効果の3つがあると言われている。身体的効果は筋緊張の緩和や姿勢保持の改善、心理的効果は行動力の発達や感情表現の豊かさの向上、社会的効果は他者とのコミュニケーション向上等の変化が認められる。

実際に高齢者からは、「腰も膝も痛みが良くなって、階段の上り下りが楽になった」「気分爽快！ まだまだ乗馬できるように頑張る」「この歳で馬に乗れるなんて思わなかった。子どもや孫に自慢している」「乗馬した日は良く眠れる」などの感想が聞かれている。以上のことから、乗馬によって先の3つの効果が実際に得られていることが感じられた。

さらに、より多くの方に乗馬の魅力を伝えるためには、その効果を客観的に検証し発信していく必要があると感じた。私と共に10年以上浦河町の乗馬療育に携わっている理学療法士が、外部専門機関と連携して様々な乗馬の効果科学的に検証し、国内外で発表しているので、その一部を簡単に紹介する。

〈バランスの改善〉

「介護予防のための乗馬」ということで、高齢者の乗馬前後のバランス変化について検証を行った。重心動揺計を使用して前後左右に重心を移動するクロステストを行い、その移動範囲を乗馬前後で比較すると同時

乗馬前後の姿勢とクロステストの比較

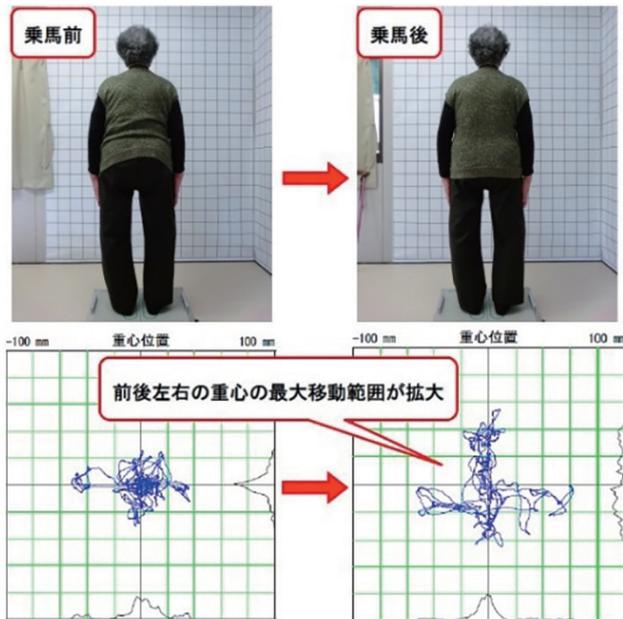


図1. バランスの効果測定

に、下肢の関節可動域も測定、比較した。その結果、下肢の関節可動域が足首を中心に拡大。またそれに伴い明らかに乗馬前よりも乗馬後に重心の移動範囲が広がり、バランスをとれる範囲が広がっていることが確認された。このことから、乗馬が高齢者の転倒予防に効果があると示唆された（図1）。

その後の研究から、乗馬を継続することで重心の移動範囲がより拡大することも認められている。

〈うつ傾向の改善〉

普段は口数が少ない方が、乗馬の際には表情がいきいきとして、積極的にお話ししている場面も多くみられる。そこで、医療機関等で使用されている、気分の尺度を6つの項目から測定する「POMS（Profile of Mood States）短縮版」を使用して、乗馬前後の気分状態を測定した。

その結果、乗馬前はマイナスの項目が高くうつ傾向の気分状態の方が、乗馬後はマイナスの項目が下がり、プラスの項目が上がったという結果が認められた。このことから、気分状態が改善され、健康な気分状態になったとすることができる（図2）。また、同時に唾液アミラーゼからみるストレス値も、乗馬前と比較すると乗馬後は減少していた。

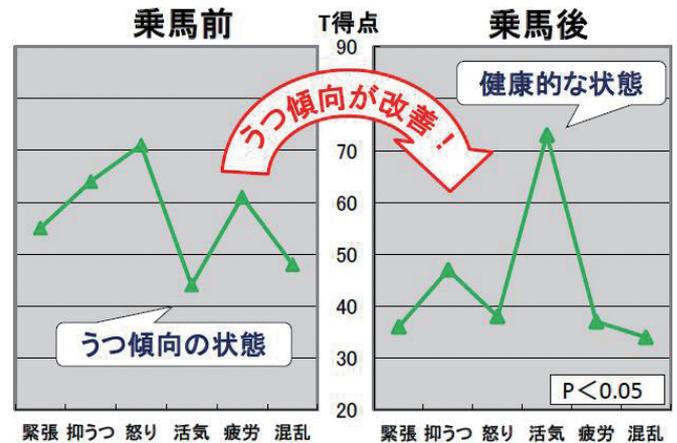


図2. 気分状態の変化

馬を通して人と人が笑い合える未来のために

浦河町では2015年からふるさと納税の活用先の1つとして、乗馬療育を選択できるようになった。また、乗馬療育を福祉サービスとしてだけではなく、まちづくりの重要な産業としても捉え、地方創生総合戦略の中にも独自の取り組みとして位置付けている。

馬の町浦河町で培われてきた乗馬療育だからこそ、行政としてもその将来性や可能性を見据え、利用者の幅を広げることで交流人口の拡大・雇用の創出も目標とし、乗馬療育を推進している。

高齢者の乗馬においては、障がい児・者の乗馬とはまた違う注意点や工夫があり、この12年で様々なノウハウが蓄積されてきた。前述の通り、効果について実証してきたことにより、介護予防のための乗馬はとても有効であり、世界的に高齢化社会になりつつある現状において将来性のある事業であると考えられる。それは、障がい者乗馬の国際学会（Horse in Education and Therapy International Congress）において当法人の理学療法士が発表した際の関心度からも伺え、私たちの活動である介護予防のための乗馬は、先進的な取り組みとして世界の中でも注目されていることを実感している。

私は高齢化が進む社会において、馬が人々に希望と活力を与える一助になると確信している。日本においても、もっと気軽に馬とふれあえ、安全で楽しく効果的な乗馬活動が広がり、ますます人も馬も活躍できる場が多くなることを願い、利用者もスタッフも笑顔で楽しみながら活動を続けていきたい。

馬事往来

輸血で活躍するユニバーサルドナー

梶 裕永



梶 裕永 (かこい ひろなが)

1967年生まれ、愛知県出身。名古屋大学大学院農学研究科博士課程前期課程修了。博士(農学)。1992年競走馬理化学研究所に入所。遺伝子分析部遺伝子分析課長。競走馬の血統登録のための血液型検査に従事した後、DNA型検査の開発を担当。現在もすべての競走馬の親子判定検査に携わる。

はじめに

子馬が誕生したとき、様々な感染症に罹らないようにするためには、母馬の初乳を摂取させることが必要です。一方で、この初乳摂取により新生子黄疸(新生子溶血)が起きる例が稀にあり、症例が重いと死に至ることもあります。この新生子黄疸の治療には輸血を行う必要がありますが、その際に活躍するのが輸血用血液を提供できる「ユニバーサルドナー」と呼ばれる馬たちです。現在、公益財団法人競走馬理化学研究所(以下、競理研)では、このユニバーサルドナー選定のための検査を実施しています。本稿では、この検査に関する情報についてお伝えしたいと思います。

新生子黄疸への対策

新生子黄疸とは、母馬の初乳中に子馬の赤血球抗原に対する抗体が存在する場合、その抗体と子馬の赤血球抗原が反応し、その結果、子馬の赤血球が壊れてしまう病気です。本症の発生率は0.1～0.2%といわれていますが^{1,2)}、症状が重篤な場合には死に至ることもあります。この病気の対策としては、「分娩前に母馬の血清中にある抗体の有無を調べる」または「子馬に症状が見られたら輸血を行う」の2つがあります。

「分娩前に母馬の血清中にある抗体の有無を調べる」ことは、予防が目的であり、間接クームス試験という方法で検査することができます。この検査の結果、抗体を持っている(陽性)と判定された母馬の初乳は子馬に与えないことで、新生子黄疸の発生を防ぐ方法です。しかし、この方法を用いた場合、実際の黄疸の発生率よりも多い10～20%という割合で母馬が陽性と判定されることが報告されています²⁾。そのため、子馬から感染予防にとっても大切な初乳摂取の機会を必要以上に奪ってしまうという欠点があります。

「子馬に症状が見られたら輸血を行う」ことは、治療

が目的であり、輸血用の血液を確保しておけば実施できます。一般に、輸血は、ドナー(供血者)とレシピエント(受血者)間で赤血球の溶血や凝集を起こしてしまう抗原と抗体の組み合わせが生じないようにすることが肝要です。このような輸血用血液を提供できる馬は、「ユニバーサルドナー」と呼ばれ、新生子黄疸を始めとした輸血を必要とする臨床現場で活用されています。最近では、新生子黄疸の対策として、前者の予防検査よりも、後者の輸血治療を実施するケースが多くなっています。

ユニバーサルドナーに求められる条件

輸血治療での活躍が期待できるユニバーサルドナーとなるためには、「血清中に赤血球抗原に対する抗体を持っていないこと」および「新生子黄疸などの原因となる赤血球抗原を持っていないこと」の2つの条件を満たしていることが必要です(図1)。

「血清中に赤血球抗原に対する抗体を持っていないこと」が必要な理由は、輸血した時に、ドナーの血清中抗体とレシピエントの赤血球抗原とが反応して、レシピエントの赤血球が壊れることを防ぐためです。これは、前述の間接クームス試験で調べることが可能です。

「新生子黄疸などの原因となる赤血球抗原を持っていないこと」が必要な理由は、上記とは逆で、輸血したドナーの赤血球抗原がレシピエントの持っている抗体(摂取した初乳中の抗体や何らかの理由で持っているレシピエント自身の抗体)と反応して、輸血した赤血球が壊れることを防ぐためです。さらには、輸血によりレシピエントに黄疸を誘発するような抗体を産生させないこと(2回目の輸血が危険となるため)にあります。この条件を確かめるためには、ドナーの赤血球抗原型を調べることが有効です。

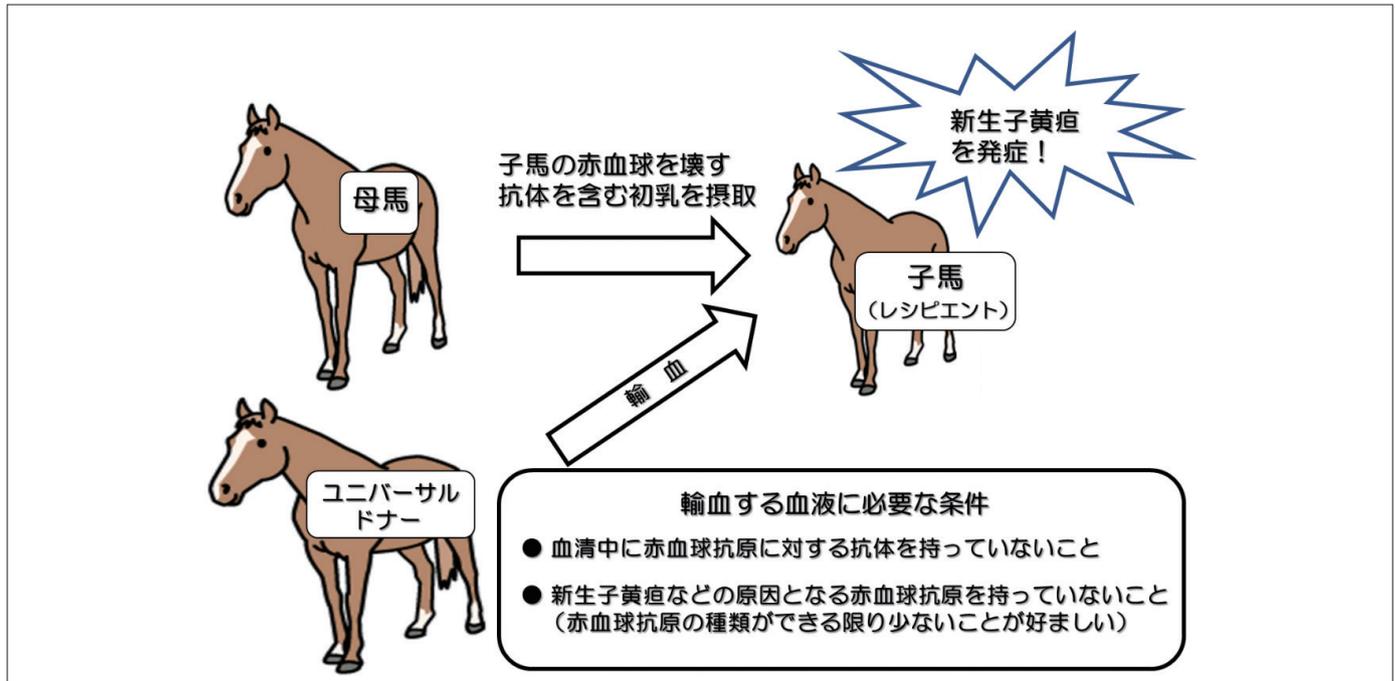


図1. ユニバーサルドナーに求められる条件

ユニバーサルドナーの選定について

では、具体的にどのような基準でユニバーサルドナーを選定すればよいのでしょうか？ 現在、競理研で検査できる赤血球抗原型は7システム24因子³⁾ですが、その中で、新生子黄疸の主な原因となる赤血球抗原は、AaおよびQaという2種類の因子と考えられています⁴⁾。また、AaやQaより頻度は低いものの、QcおよびUa因子による新生子黄疸も観察されています^{5,6)}。「血清中に赤血球抗原に対する抗体を持っていないこと」を確かめるためには、このAa、Qa、Qc、Ua因子を中心に、その他できるだけ多くの因子に対する抗体がないことを間接クームス試験で検査します。

一方、「新生子黄疸などの原因となる赤血球抗原を持っていないこと」を確かめるには、いくつかの違った考え方があります。まず、最も重要なAaおよびQa因子を持たない馬を輸血用に使用する⁷⁾とした報告があります。これらの因子が新生子黄疸の主要な原因であることを考慮すると、輸血治療に用いても大半が安全に使用できる可能性があります。また、因子の数が絞られていることで、ユニバーサルドナーの確保が比較的容易なことも利点です。なお、AaおよびQa因子を高頻度に持っていない品種としては、クォーターホース (Aa- : 51%, Qa- : 83%) やスタンダードブリード (Aa- : 44%, Qa- : 100%), モルガン (Aa- :

43%, Qa- : 99%) などが報告されています (<http://www.eclinpath.com/hemostasis/transfusion-medicine/blood-types/>)。我が国においても類似の研究がなされており、調査したハフリンガーの54.5%がAaおよびQaの両因子を持たず、さらに、血清中に抗体も持っていなかったことが報告されています⁸⁾。したがって、これらの品種を重点的に検査することで、効率よくユニバーサルドナーを確保できる可能性があります。ただし、これは頻度の問題であり、他の品種であってもユニバーサルドナーになれる可能性がないわけではありません。

また、より高い安全性を求めるには、新生子黄疸の原因となる因子をできる限り持たない馬を選ぶことに越したことはありません。海外では、AaとQaに加えてQcとUaの計4因子を焦点に新生子黄疸予防のスクリーニング検査を実施している検査機関もあります (<https://www.hagyard.com/venoatal-isoerythrolysis> など)。さらには、これら以外にも6つの因子が関係しているとの報告もあります (<https://www.vetmed.ucdavis.edu/hospital/support-services/lab-services/clinical-laboratory-services>)。競理研では、これまでの研究報告やこれら海外検査機関の実績を基に、実用面と安全面をそれぞれ考慮し、血清中の抗体およびAa、Qa、Qc、Uaの4因子の有無を基準とした選択ができるよう、図2のように、ユニバーサルドナーとして「可」、「推奨しない」

および「不適」の3つの区分を設けています。また、品種についても限定することなく検査を実施しています。表1には実際の検査結果と区分の例を、また表2には、近年に実施したユニバーサルドナー選定のための検査の結果を3つの区分別に示しました。

ユニバーサルドナーについて注意すべきこと

このように、一定の基準を設けながらユニバーサルドナーは選定されますが、基準に含まれない赤血球抗原因子や血清中の抗体が原因で、輸血の効果を発揮できない場合や、さらには輸血により症状が悪化する可能性が全くないわけではありません。ユニバーサルドナーは輸血用馬として有用であるけれども、絶対安全ではないということを忘れないで欲しいと思います。

ユニバーサルドナーの選定のための検査では、表1のように、赤血球抗原型検査と間接クームス試験による血清中の抗体検査が実施されます。赤血球抗原型は生涯不変のものですから、一度調べれば再検査は必要ありません。一方、血清中に存在する赤血球抗原に対

する抗体については、最初に調べた時に存在しなくても、経産や輸血経験あるいは何らかの理由によって新たに産生される場合があります。その場合、その血液の輸血は危険を伴うこととなります。これを回避するためには、一度ユニバーサルドナーと認定された馬でも、定期的な抗体検査を受けることが望ましいと思われれます。

ユニバーサルドナーを活用するために

これまで述べてきましたように、競理研の検査は、検査結果を受け取った依頼者が自ら判断する余地を残した形式での報告となっています。私たちは、より安全な「可」の区分の結果が得られた馬をユニバーサルドナーとして活用してもらいたいと思っていますが、「推奨しない」の区分に該当する馬でも一定のリスクがあることを知ったうえでならばドナーとして使うことも不可能ではないと考えられます。いずれにしても、ユニバーサルドナーを有効かつ安全に活用するためには、実際の診療にあたる獣医師の適切な判断が不可欠

ユニバーサルドナー選定における3区分

1. ユニバーサルドナーとして不適

以下のいずれかに該当する場合

- 赤血球抗原型 Aa (+) である
- 赤血球抗原型 Qa (+) である
- 血清中に抗体を保有している

2. ユニバーサルドナーとして推奨しない

(不適ではないが、3に比べて事故等の発生リスクがやや高い)

1のいずれにも該当しないが、以下のいずれかに該当する場合

- 赤血球抗原型 Qc (+) である
- 赤血球抗原型 Ua (+) である

3. ユニバーサルドナーとして可

1, 2のいずれにも該当しない場合

※上記のユニバーサルドナー選定における区分は、学術論文等の報告に基づき当研究所が設定したのですが、“可”と区分したものであっても血液型不適合による事故等の発生が完全に防止されることを保証するものではありません。

※ユニバーサルドナーとして“可”とされた馬であっても、経産や輸血経験あるいは何らかの理由によって血清中に抗体が出現することがあります。そのため、定期的な(例えば年1回)血清中の抗体検査を行うことをお勧めします。

図2. 競走馬理化学研究所におけるユニバーサルドナー選定のための区分

表 1. ユニバーサルドナー選定のための検査（赤血球抗原型および血清中の抗体検査）成績書（例）

No.	馬名	競理研 検査番号	A			C	D														K		P				Q			U	血清中の 抗体の有無								
			Aa	Ab	Ac	Ca	Da	Db	Dc	Dd	De	Df	Dg	Dh	Di	Dk	Di	Dn	Ka	Pa	Pb	Pd	Qa	Qb	Qc	Ua													
1	○○○	19XX01	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	抗体無
2	△△△	19XX02	-	+	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	+	+	-	-	+	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	抗体無	
3	●●●	19XX03	+	-	-	+	-	-	+	+	+	-	+	-	+	+	+	+	-	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	抗体有（64倍）	

競走馬理化学研究所においては、ユニバーサルドナー馬として、No.1は「可」、No.2は「推奨しない」、No.3は「不適」と区分される。

表 2. ユニバーサルドナー選定のための検査の結果

検査年度	頭数 (n)	ユニバーサルドナーとしての区分		
		不適	推奨しない	可
平成 27 年	28	57% (16/28)	29% (8/28)	14% (4/28)
平成 28 年	49	65% (32/49)	22% (11/49)	12% (6/49)
平成 29 年	22	73% (16/22)	5% (1/22)	23% (5/22)

であるのはもちろんのこと、定期的なあるいは必要に応じた血清中の抗体検査の実施を含めた適切な馬の飼養管理も重要であることを申し添えたいと思います。

おわりに

競理研では、サラブレッドの血統登録に必要な技術として赤血球抗原型分類法を開発し、親子判定の検査に応用してきました。現在の親子判定の検査はDNA型分類法へと移行したため、赤血球抗原型分類法を用いることは無くなりました。現在、私たちは、この長年培ってきた技術をユニバーサルドナーの選定という全く別の目的で利用しています。これからも、この技術が生産地の子馬の命を救うことに少しでも役立てばと願っています。

ユニバーサルドナー選定のための検査では、検体の受付後、約2週間以内に結果を報告します。検査の詳細については、競理研のホームページ (<http://www.lrc.or.jp/>) をご覧ください。この検査を受けていただくことで、様々な場面に貢献できる馬たちが見つければ幸いです。

参考文献

- 1) 小笠原慶. 2018. 新生子黄疸症例報告. 日本ウマ科学会第31回講演要旨集: 27.
- 2) 赤島智博, 他. 1999. ウマ新生子黄疸症予防検査への抗ウマγグロブリンモノクローナル抗体の応用. 北畜会報41: 58-62.
- 3) 梶 裕永. 2010. 競走馬の親子判定—検査法の過去・現在・未来—. Hippophile 41: 9-20.
- 4) Sandberg, K. and Cothran, E.G. 2000. Blood Groups and Biochemical Polymorphisms. In: A.T. Bowling and A. Ruvinsky (eds), The genetics of the horse, pp85-108. CABI publishing, Oxfordshire.
- 5) Scott, A.M. and Jeffcott, L.B. 1978. Haemolytic disease of the newborn foal. Veterinary Record 103: 71-74.
- 6) de Graaf-Roelfsema, E., et al. 2007. Non-specific haemolytic alloantibody causing equine neonatal isoerythrolysis. Veterinary Record 161: 202-204.
- 7) Slovis, N.M. and Murray, G. 2001. How to approach whole blood transfusions in horses. AEEP Proceedings 47: 266-269.
- 8) 加藤史樹, 他. 2008. ウマの輸血におけるユニバーサルドナー確保のためのウマ赤血球抗原型検査成績. 日本ウマ科学会第21回講演要旨集: 47.

特別記事

歌志内から、世界へ ～ソメスサドルの挑戦～

三浦暁子（写真：村田利之）



三浦暁子（みうら あきこ）
エッセイスト。1956年生まれ。上智大学文学部史学科卒業。結婚後、文筆活動を開始する。
ウマ科学会評議員、兵庫県のじぎく文芸賞選考委員、神戸新聞文芸エッセー部門選者。著書多数。

はじめに

馬の世界に身をおくものが親しみを持って接する会社、それがソメスサドルだ。日本国内で唯一となった馬具メーカーである。

会社の名前であるソメスサドル（SOMÈS SADDLE）は、SOMMET（頂点）+ SADDLE（鞍）の2つの単語を重ねて作った言葉だ。今や、ソメスサドルが製作する馬具は、日本の頂点をいくものであり、その名に恥じない製品を作り出している。

とくに、鞍（くら）の品質には定評があり、武豊やミルコ・デムーロ、クリストフ・ルメールなど、一流ジョッキーの信頼が篤いことでも知られている。ジョッキーたちは自ら工場に出向き、自分の使う鞍について希望を伝えることもあるという。

考えてみると、騎手にとって、馬具は単に馬に乗るために必要な道具というわけではない。それは自分の命を託すものであり、レースの勝敗にも大変重要な意味を持つ。もし、馬具がレース中に破損するようなこ



ソメスサドルが伊勢神宮での式典のために宮内庁に納めた馬車具



武豊のサインが入った鞍。トップジョッキーからのオーダーも多い。

とがあれば、騎手は地面にたたきつけられ、命を失う危険もある。まさに命綱とっていい存在だ。

騎手自らが北海道にあるソメスサドルまで足を運び、それがどうやって作られているのかその目で見て確かめたいのは、当然のことだろう。自分が毎日のように使う馬具を作っている職人さんたちに会ってみたいという願いも叶えたいだろう。

ところで、2006年の有馬記念、武豊が名馬ディーブインパクトとのコンビで有終の美を飾ったとき使われたのは、他にもないソメスサドルの鞍だった。人生の一番に選ぶ鞍がメイド・イン・ジャパンであることに感動しないではられない。

では、ソメスサドルはいかにしてソメスサドルとなったのだろうか。古い歴史を持つヨーロッパの馬具会社がいかにして追いつき、追い抜こうとしているのかについて、興味はつきない。馬具は馬と人間をつなぐものに他ならないからだ。

本稿では、ソメスサドルの歴史をたどりつつ、メイド・イン・ジャパンの馬具がいかにして生き残ったかについて、探っていきたい。

ソメスサドルの歴史

ソメスサドルは、現在、北海道の砂川市で製作と販売を行っている。1997年に「砂川ファクトリー&ショールーム」として開設された社屋で、札幌と旭川の間に広がる石狩平野の中央部に位置する。

この社屋ができる前は、砂川から西へ13キロほど離れた歌志内の神威に本社と工場があった。ここは、ソメスサドル誕生の地と言っていいだろう。河の近くに



良質な素材と職人の技術が生かされた鍔革

ある小さな建物には、ソメスサドルの源がつまっている。まるで小さな「祠」のようだ。

事業の拡大によって手狭になり、砂川に移転はしたものの、その精神は今も引き継がれている。本社の登記がいまだ代わることなく歌志内となっていることにも、会社が始まった頃の精神を忘れないでいようとする思いゆえだろう。

移転した「砂川ファクトリー&ショールーム」は、工場とショールームが直結しており、生産と販売が同時に行われている。この点が、ソメスサドルをソメスサドルたらしめているといえよう。

作り手と売り手が共にものづくりをする体制は、人馬一体ともいわれる馬と人との関係を思わせる。

ヨーロッパ建築を思わせる「砂川ファクトリー&ショールーム」は、北海道赤レンガ建築奨励賞とグッドデザインほっかいどう施設選定受賞を果たしており、周囲の風景とも溶け合って独特の雰囲気醸し出している。



時を刻む、今では入手困難な貴重な革

建物の周囲は、社員達が自分たちの手で植えたという700本の木々に囲まれている。森に抱かれているような建物は、自然からの贈り物である革を扱うのにふさわしい環境である。

ソメスサドルは、馬具づくりからスタートした会社であるが、現在ではバッグの製造販売も行っており、むしろ男性用のバックで有名になった。

1970年後半、会社を安定化するために、馬具作りだけではなく、他の製品も作ることを迫られた際に、鞍を製作するために培ったテクニックを駆使したものづくりを積極的に行うようになった。馬具作りの技術はいかなく発揮され、2008年の主要国首脳会議となった洞爺湖サミットで、G8各国の首脳夫妻への贈り物として選ばれるまでになったのである。ソメスの華やかさ、ここに究まれりと宣言したくなるほど喜ばしい出来事だろう。

まさに順風満帆な営みである。

しかし、その歴史をたどると、その始まりから現在まで、苦難につぐ苦難であったことがわかる。馬具作

りの原点となったのは、炭鉱の閉鎖という暗い現実であったのだ。

ソメスサドルの歩んできた道のりを追うことによって、馬具を作り原点を探りたい。

炭鉱町で誕生した馬具屋

かつて、北海道には多くの炭鉱があった。石炭は黒いダイヤとも呼ばれ、炭鉱で働く人々は日本のエネルギー産業を支える力となっていた。危険で骨の折れる仕事ではあるが、収入もよく、彼らが集まり住む町は独特の華やかさに満ちていた。

歌志内もそのひとつで、かつては人口5万人に迫る大きな町であった。しかし、石油という新しいエネルギー政策が転換され、炭鉱町を疲弊していく。

石炭産業が斜陽になると、人口は減り、町はさびれる一方となった。かつては、「炭鉱城下町」とか「北海道のジバリーヒルズ」とまで呼ばれた繁栄は、閉山によって立ち消えてしまった。

そんなとき、歌志内の町をなんとかしようと立ち上

がった人々がいた。石炭産業の再興は不可能とわかったとき、他の産業を誘致し、地域を活性化することが急務である。そのためには、なんとしても新しい産業を誘致しなければならない。

候補に挙がったのが、馬具作り産業であった。

かつては北海道の開拓で必要とされた農耕馬も、機械化と共に姿を消していった。同時に、馬具を作る職人達もせっかくの腕を使う場がなくなっていた。

そこで、札幌の馬具会社を中心にして、札幌の経済界の人々や、地元歌志内の人々が集まった。今でいうところの「故郷創生」的な行動に出たのだ。そしてできたのが、ソメスサドルの前身、「オリエントレザー株式会社」である。産炭地振興条例の適用を受けてのスタートであった。

その中に、市議長をつとめる染谷政志がいたことが、後のソメスサドルを産むきっかけとなった。政志は郷土愛にあふれた人物であり、現在、ソメスサドル会長の染谷純一と社長の昇の父親である。

時は1964年、東京でオリンピックが華々しく開催さ

れたときだった。東京は発展に向けて前進し続けていたが、歌志内では生き残りをかけた戦いが始まっていたのだ。

このままでは駄目だ、人々のこうした熱い思いが通じたのか、馬具の商売は好調なすべり出しを見せた。多くの人の知恵を集めたことが功を奏したのだろう。輸出を専門としていたこともあり、レジャー用の馬具を販売するオリエントレザー社は、ヨーロッパや、アメリカ、カナダ、中南米で確実に売り上げを伸ばしていった。1ドル360円の固定レート時代である。安く良い商品を提供できる日本は重宝がられていた。

もともと、日本国内での馬具の消費は限られたものであった。しかし、オリエントレザー社のマーケットは海外をターゲットとしていたため、深刻な問題は生じなかった。

ところが、1973年、第一次オイルショックにより、状況は一変する。円が高騰し、オリエントレザー社は債務超過となり、窮地に陥った。

困難の中、なんとか会社を建て直そうと社長に就任



1つ1つ手作業で型を抜く



贅沢な余韻を残す上質な牛革

し必死の努力を続けていた染谷政志であったが、過労がたたったのか脳血栓で倒れてしまった。さぞや無念であったろう。

代わって社長職を引き受け、会社の立て直しをはかったのが、長男の染谷純一現会長だった。とくに卓越した革の知識があるわけではなく、すべてはいちからの勉強であった。

負債をかかえた会社を建て直すために、何でもしよう。それが染谷会長の考えだった。革製品の注文があれば何でも作った。電気工事の際などにドライバーやペンチを入れておく道具、ピストルのホルダーなどなど。仕事を選ぶ余裕などなかったのだ。

しかし、その苦労がやがて実を結び、丁寧なものづくりの精神性が徹底されていく。

ソメスサドルの誕生まで

弟の染谷昇も懸命の努力を続けていた。父が社長に就任したとき、染谷昇はまだ大学生。東京の大学に通いながら、アルペンスキーに打ち込む日々を送って

いた。

しかし、億単位の負債を抱えた会社のために奔走する父と兄を傍観していることはできない。大学を卒業後、1年の修行を経て、1976年オリエントレザー社に入社した。

名目上は「オリエント商事東京出張所」の所長という肩書きであったが、実情は一人きりで営業所を営んでいた。スキーの道具のことは詳しくなかったが、馬具はまったくわからない。乗馬もしたことがない。東京に知り合いもなく、営業のやり方もわからない。

しかし、昇は持ち前の行動力を発揮し、北海道から送ってきた商品を車に積み、走り回った。馬具の行商人として、馬のいるところや東京の町をひたすら走り回ったのだ。

その必死さが伝わったのだろうか。

多くの乗馬関係者が、自然と彼の師匠と言うべき存在になってくれた。乗馬クラブのメンバーが馬の乗り方を指導してくれたこともある。クラブのオーナーが、クラブに居候することを許してくれたりもした。外国

製の鞍を与えて、これと同じものを作ってごらんと
言ったこともあった。

昇にとって、毎日が勉強だった。

しかし、勉強だけしているわけにはいかなかった。
とりあえずは、自分で食べていかななくてはならない。

そのため、「馬」と名のつく店にはすべて営業をかけた。
乗馬や競馬とは直接、関係がない店でも諦めなかった。
馬の名のつくバー、居酒屋、レストラン、喫茶店
などに立ち寄っては、鞍そのものではなく、鞍の形を
したコインケース、キーホルダーなど、何でも作った。

地道な努力を続けていた昇だったが、26歳の時、ひ
とつの転機が訪れる。ドイツで開催される展示会に出
店するため、ヨーロッパに出向くことになったのだ。
馬具の本場での勉強の日々…。このヨーロッパ旅行で
は、憧れていたパリのエルメス本社を訪ね、ミュージ
アムの見学も果たした。フランス語が読めないからと
入り込んでしまったおかげだという。

とりあえず現場に行ってみる、すると、何かしらの
出会いに恵まれる。それを染谷昇は「奇跡みたいでし
た」と表現するが、起こるべくして起こった出来事な
のだろう。

そして、10年が経ち、1986年に「ソメスサドル」と
社名を変更し、ソメスのブランドを冠した製品作りに
着手することになる。

その後も、リーマンショックの影響で男性用バッグ
が売れなくなるなど、苦難の時期はあるが、その度に
どうにか乗り切ったのは、ソメスサドルの原点が馬具
であったからだと思ふ。

馬具の技術をカバンに生かす

ソメスサドルの作るバッグは、馬具造りで培った技
術を取り入れているところが特徴的である。

まず、革の裁断だが、馬具に使う革は厚手なため、
カバンとして使うときにはカットにも工夫が必要であ
る。とくに代表作品であるスリムダレスカバンの場合
は、抜き型と革裁ち包丁を使う。

裁断した革を縫製する段階になると、さらに人間の

手による工程が多くなる。糸は馬具用のため、ロウ引
きしてある。当然、糸は太くなるが、その糸の先端を
ヘラでそいで、細くなった部分を針穴に通さなければ
ならない。まさに職人技だ。それだけではない。その
そいだ糸を2本の針で表と裏から縫製していく。

この「糸をそいで捩り、2本針で縫う」という手法
は馬具職人ならではの技術であり、誰もができること
ではない。まさにソメスサドルをソメスサドルたらし
めた方法だといえよう。

むすびにかえて

困難の極みから始まったソメスサドルは、こうして
現在も丁寧な仕事を続けている。それは結局、馬具を
作る上でのイズムがソメスサドルには脈々とあったか
らだろう。

ソメスサドルの歴史については、さらなる取材と勉
強を続けるべきであることは言うまでもない。それが
今後の課題である。

1964年東京オリンピックの年に始まった会社が、
2020年の東京オリンピックでどんな役割を果たすの
か、興味はつきない。

ソメスサドルを知ったばかりの頃、私は「皮」と
「革」の違いさえよくわからなかった。皮は動物の皮を
はいだものだが、それだけでは、使い物にならず、や
がて腐ってしまうことも、なんとなくわかっていただ
けだった。しかし、やがて多くの方の教えを得て、先
人達が皮を加工することによって、私達が使用できる
革となるのを知った。そして、ものづくりの凄みを見
せつけられたような気持ちになった。

ソメスサドルもおそらく、最初のうちは皮の状態で
始まった会社だったろう。けれども、染谷政志に始ま
り、息子である純一・昇に受け継がれた努力が、多く
の人を動かし、皮を革に変えたのだ。

誰もが最初は素人だ。しかし、たゆみない努力が、
素人をその道の専門家に変えていく。ソメスサドルに、
私はひとつの奇跡を見たと思ふ。

特別記事

日本ウマ科学会 2018 年臨床委員会 招待講演および講習会について



井上裕士 (いのうえ ゆうじ)
有限会社シンボリ牧場に4年間、日高軽種馬農業協同組合エクワインメディカルセンターに10年間勤務後、オーストラリアビクトリア州のGoulburn Valley Equine Hospitalでインターンとして1年間勤務。1993年に帰国後、有限会社イノウエ・ホース・クリニックを開業し、現在に至る。論文の投稿やAAEPで発表するなど、積極的に学術活動に傾注している。

井上裕士¹，村中雅則²，宮越大輔³，
佐々木直樹⁴

¹イノウエ・ホース・クリニック，²JRA 美浦トレーニングセンター競走馬診療所，³NOSAI みなみ家畜高度医療センター，⁴山口大学共同獣医学部大動物臨床学研究室

これまで日本ウマ科学会「臨床委員会」は、馬臨床において国際的に著明な専門家を招聘して、招待講演、症例検討会、講習会、ラボなどを開催してきました。2018年は米国よりMadigan先生ならびにAleman先生を招待いたしました。11月27日にはJRA美浦トレーニングセンター競走馬診療所にて講習会と実習を行い、11月28・29日には軽種馬生産技術総合研修センターにて獣医師に対する講習会と実習をしていただきました。12月4日に国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）にて開催された日本ウマ科学会第31回学術集会では、症例検討会を開催いたしました。本稿では、その概要をご紹介します。

招聘講師紹介

Madigan先生はUC Davis 獣医学部の医学と疫学の教授であり、国際動物福祉訓練研究所のディレクターです。馬の内科専門医として、250以上の論文を執筆しており、新生子学に関する2つの教科書の編集者でもあります。日本国内ですでに普及している子馬の出生時の新生子不適応症候群に対するローピングテクニックを研究されたほか、カリフォルニア動物緊急対応運営委員会と米国馬医師福祉委員会のメンバーとして、大動物用リフト器具の開発に従事しました。

またUC Davis Veterinary Emergency Response Team (VERT) を設立し、カリフォルニア州やアメリカ国内の洪水、火災などの災害に個人的に対応してきました。2010-2012年の動物災害支援のために選任された主任研究者でもあり、緊急時の安全かつ人道的な救助や保護に対応できる人材を育成してきました。

Madigan先生の奥様であるAleman先生は、UC Davisにおいて2004年に博士号を、また1999年および2012年にそれぞれ大動物内科および獣医神経学の専門医を取得されています。100以上の論文や数々のテキストブックの執筆やAAEP年次大会でのセクションチーフを担当されるなど、馬の筋神経疾患の第一人者として活躍されています。

臨床委員会症例検討会

12月4日（火）は両国の国際ファッションセンターKFCにおいて症例検討会が行われました。症例検討会では、[馬の新生子内科疾患]をテーマに発表者が臨床現場において遭遇した症例や診断・手術手技に関する報告などについて発表し、それぞれの発表に際して活発な意見交換が実施されました（図1）。Dr. Madiganは日程の都合により症例検討会には参加できません



図1. 症例検討会

したが、参加者にとって有益な時間となったと考えています。

発表者と演題は以下の通りです（敬称略）。

1. 高齢の母馬（輓系）から生まれた子馬の管理
滄木孝弘（帯広畜産大学）
2. 新生子適応障害症候群に対する Rope Squeeze の治療成績
宮越大輔（NOSAI みなみ日高支所家畜高度医療センター）
3. 一牧場における HIE に対する早期診断・治療
大久保正人（ノーザンファーム）
4. 新生子溶血症 症例報告
小笠原 慶（NOSAI みなみ日高支所西部家畜診療センター）
5. 新生子における四肢の屈曲異常と甲状腺ホルモンについて
敷地光盛（エルムホースクリニック）
6. オキシテトラサイクリン投与後の急性腎不全を発症した新生子馬の一例
遠藤祥郎（JRA 日高育成牧場）

大久保先生の発表では新生子馬での APGAR スコアの活用により迅速な初期治療を実施することの有用性に加え、診断補助マーカーとしての血糖値、血中乳酸値の利用、さらに治療でのステロイド、マンニトールの使用についても紹介しており、多くの参加者にとり有用でありました。また、小笠原先生からは新生子溶



図2. JRA 美浦トレーニングセンター競走馬診療所での講演の様子

血症の治療のためにユニバーサルドナーからの輸血が必要であり、供血用ユニバーサルドナーの所在および供血ルールなどの供血にかかわる環境整備の重要性が提言されました。今後、供血環境の整備が整うことが強く望まれます。

JRA 美浦トレーニングセンターにおける講習会

11月27日はJRA 美浦トレーニングセンター競走馬診療所において、「競走馬の神経学的検査について」と題した Dr. Aleman による講演が行われ、JRA 獣医師だけでなく開業獣医師や牧場の獣医師など40名以上の方々にご参加いただきました（図2, 3）。今回の講演は神経疾患という比較的難しい内容でしたが、診断法や各疾患の特徴、類症鑑別のポイントや治療法に至るまで多くの画像や動画を用いて分かりやすく解説していただきました。

JRA トレセンで働く獣医師にとって、このような神経疾患と出会うケースはあまり多くありませんが、本講演では様々な異常歩様を呈する馬の動画が紹介され、中にはこれまで見たことがないような貴重な症例も多数拝見することができました。講演の中で、Dr. Aleman は、「異常を見分けるには、まず正常を知ることが大切」ということを繰り返し強調していました。これはごく当たり前のことではありますが、馬の歩様は個体毎に癖があり微妙に異なっているため、短時間の診療では正常か異常かを判断するのはなかなか難しいこともあります。Dr. Aleman は運動失調を5段階で Grade 分類していましたが、今回示していただいた比



図3. JRA 美浦トレーニングセンター競走馬診療所での実習の様子

較的軽度な症状である Grade 1~2 の動画は一見正常に見えるほど軽微な異常であり、これまでの診療を振り返ってみると、神経症状と認識できなかった症例もあったのではないかと反省すると同時に、歩様検査の重要性を改めて再認識しました。

トレセンのような集団飼育施設では、神経症状を認めた場合にはまず馬鼻肺炎などの伝染性病でないことを確認することが最も重要となります。これまでも症状の程度に関係なくこれら伝染病の有無を調べるための検査は必ず実施していますが、特に予後不良と診断されるような重度の神経疾患においては、原因究明のためのそれ以上の生前診断が不十分な場合も多かったのではないかと思います（病理学的診断は実施しています）。今回の講演では、様々な神経疾患の診断法やそれぞれの特徴を学ぶことができたことから、今後の診療に役立つものと考えられます。

また、今回は時間の関係で実習こそ予定されていませんでしたが、偶然にも当診療所において神経症状で経過観察中の症例が入院していたため、講演終了後に実際の症例で簡単な神経学的検査のデモンストレーションを行っていただきました。その結果、本症例の神経症状による跛行は非対称性であることから、Dr. Aleman による診断は、我々と同様、寄生虫の迷入による脊髄損傷が最も疑わしいというものでした。多くの獣医師にとって神経疾患を診る機会はそれほど多くはないかもしれませんが、症例が少ないからこそ今回の講演は極めて貴重な経験となりました。



図 4. JBBA での生産者を対象とした講習会の様子

静内における生産地生産者向け講習会、 獣医師向け講習会

11月28日午後6時より2時間にわたって Madigan 先生の牧場関係者に対する講演会がホテルエクリプスで開催されました。生産地では先生が研究された新生子不適應症候群に対するローピングテクニックをすでに知っている方も多く、その関心の高さも手伝って260名以上の方が参加しました（図4、5）。

初めの1時間は“新生子に対する牧場でのチェックポイントと管理”というテーマで、主に新生子の1)健康のための予防衛生措置、2)正常なパラメータ、3)異常の早期発見、4)ハイリスク馬の管理方法について概説されました。具体的にはワクチン接種、駆虫、初乳の重要性や、分娩時の馬房や臍帯を含む新生子の衛生管理など、間近に迫った繁殖シーズンで必要とされる知識の再確認でした。私たちも日ごろから痛感していますが、新生子に何か問題が生じた際には生死に直結するので“Wait and see（様子を見る）”はするべきではなく、早期治療が非常に重要であることを強調されていました。

後半では、先生が研究された新生子適應障害症候群に対するローピングテクニックについて、動画を用いて解りやすく実践的に講演されました。新生子適應障害症候群は多くの生産者や獣医師が経験している馬の生死にかかわる重篤な疾患で、救命には多大な労力とコストが必要とされます。しかし、発症してすぐに（獣医師が現場に駆け付ける前でも）胸部を圧迫するローピングを20分程度実施すると、新生子が正常な状態に戻るといった画期的な方法です。聴講されていた牧場関



図 5. JBBA での獣医師を対象とした講習会の様子

係の方々は、自分たち自身で処置できるということもあり、熱心に説明を聞いていました。

11月29日に開催された獣医師向け講習会では、Aleman先生の講演テーマは“サラブレッド種における神経筋疾患：臨床例について”で、その中でまず筋疾患の大まかな分類と診断のための生理学および筋バイオプシーを説明され、筋疾患の臨床例として日本でもなじみのある再発性労作性横紋筋融解症や白筋症、あまり診断されていない多糖類貯蔵性筋疾患、筋硬直症、大動脈腸骨動脈血栓症など事例を挙げて説明していただきました。また神経疾患として、私たちも頻繁に遭遇する頸椎圧迫性／狭窄性脊髄症（ウォブラー症候群）について解説していただきましたが、アメリカでは外科的に治療するケースはあるものの、未だに確たる予防法及び治療法は確立していないようでした。日本では見られない馬ヘルペス脳脊髄障害についても説明され、その症状、診断、治療法等に関して興味深く拝聴することができました。

Madigan先生は“馬新生子学：新生子適応障害症候群における新たな知見”というテーマで講演していただきました。前夜に説明されたローピングテクニックに端を発し、なぜそれが症状の改善につながるかを生理学的に証明されてきたという内容です。新生子適応障害症候群は、ごく最近まで分娩時に発症する胎子の酸素欠乏による脳障害であると考えられてきました。胎子は母馬の子宮内にいるときにはallopregnanolone等の抑制系神経ステロイドの作用により睡眠状態となり、母体内で過度に動くことが抑制されています。このホルモンは分娩時に胎子の胸部が産道内で圧迫されている状態では血中濃度が保たれたままになりますが、その時の軽度な低酸素状態が引き金となり、出生後に濃度が急激に低下し外部の環境に適応していきます。Madigan先生は新生子適応障害症候群の罹患馬では、症状や経過が低酸素脳症のものと異なること、また抑制系神経ステロイドの血中濃度が高いことから、胎子が産道を通る際の低酸素状態になっている時間が短いことなどが原因で、適応障害に陥るのではないかと推察し、それを科学的に証明されてきました。したがって、患馬の胸部を圧迫することにより産道での軽度な低酸素状態を再現され、症状が改善するのではないかと説明されていました。今日まで“新生子適応障



図6. 企業展示会場（国内14社の協賛による企業展示）

害は低酸素脳症が原因”とされ、治療として酸素吸入等を積極的に実施していた私たちにとって、非常に新鮮で興味深い講演となりました。

企業展示

今年度は、国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）においてプラチナ・スポンサーのEBMトレーディングジャパンならびにDRTECHをはじめとする国内17社の協賛による企業展示が行われました（図6）。また、DRTECHならびに富士フィルムヘルスケアラボラトリーの2社によるランチョンセミナーが開催されました。今年も、企業展示会場では、スタンプラリーを企画させていただき、企業ブース10ゾーンでのサインを集めると、ロンシャン バッグなどの豪華賞品の当たる抽選会を開催いたしました。また、会場ではコーヒーやワインの提供をさせていただきました。協賛いただきました企業関係者に衷心より感謝申し上げます。来年度も国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）で企業展示スペースをゆったりと確保できる予定です。会員の皆さまへのサービス提供を充実させて参ります。

おわりに

2019年の臨床委員会では、運動器を専門とする講師を招聘して、招待講演、症例検討会、軽種馬生産技術総合研修センターでの講習会を予定しております会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

Journal of Equine Science

Vol. 30, No. 2, June 2019

和文要約

原著

日本における競走出走後の熱中症発症状況と競馬場の気候条件に関する調査——野村基惟¹, 塩瀬友樹², 石川裕博³, 溝部文彬⁴, 酒井哲志⁴, 草野寛一³ (日本中央競馬会競馬学校診療所,²日本中央競馬会競走馬総合研究所,³日本中央競馬会栗東トレーニング・センター競走馬診療所,⁴日本中央競馬会美浦トレーニング・センター競走馬診療所) …………… 17

近年, 競馬産業において, 馬に対する動物福祉上の観点から, 競走出走後に発症する労作性熱中症 (EHI) への関心が高まっている。しかし, 競走出走後の EHI 発症状況に関する報告はほとんどない。また, 熱中症対策を検討するうえで気候条件は重要な要素だが, 日本の競馬場における現状は把握されていない。そこで本調査では, 日本における過去 20 年間の出走後 EHI 発症状況と, 競馬場の気候条件について調査した。1999~2018 年に日本中央競馬会の競走出走したサラブレッド延べ 975,247 頭の医療データを回顧的に調査したところ, EHI 発症件数は 387 件で, 全体の出走後 EHI 発症率は 0.04% と算出された。年ごとの出走後 EHI 発症率は調査開始から上昇傾向で, 最近 4 年間は 0.07% を超えていた。夏季 (5~9 月) に出走した延べ 409,908 頭に限定して調査すると, 全体の発症率は 0.086% だった。また, 北緯 34 度から 43 度まで分布する 10 箇所の競馬場ごとの月別 (5~9 月) 発症率は, 0~0.459% の範囲で大きく異なっていた。夏季 (5~9 月) における競馬場周辺気象台の月平均気温と EHI 発症率とを比較すると, 月平均気温が高い競馬場では EHI 発症率も高い傾向にあった。また, EHI 発症率上位 3 競馬場において, 2017~2018 年 7~8 月の競走実施日のうち, 日の日照率が 40% を超えた日を対象として午前 9 時から午後 5 時までの湿球黒球温度 (WBGT) を調査したところ, 全測定期間のうちそれぞれ 95%, 94% および 65% の期間が WBGT 値 28~33°C の範囲で推移していた。この結果から, 調査した 3 競馬場を実施される夏季の競走の多くは, WBGT 値 28~33°C の

環境下で実施されていることが明らかとなった。これらの調査結果は, 日本における夏季の競馬実施に対する効果的な暑熱対策を検討するための基礎的データとして有用と考えられた。

関節鏡手術中のセボフルランおよびメドミジン麻酔下サラブレッド種競走馬における, チオペンタール/グアイフェネシンとプロポフォール/ケタミン麻酔導入法の回顧的比較——徳重裕貴¹, 荒木成就², 草野寛一², 有馬大輔², 伊藤瑛基², 山崎洋祐², 浦山俊太郎², 上林義範², 立野大樹², 太田 稔¹ (日本中央競馬会競走馬総合研究所,²日本中央競馬会美浦トレーニング・センター) …………… 25

本研究では, 関節鏡手術中のセボフルランおよびメドミジン麻酔下サラブレッド種競走馬における, チオペンタール/グアイフェネシン (TG) 導入法とプロポフォール/ケタミン (PK) 導入法の臨床特性について比較した。2015 年から 2016 年の間に腕節構成骨々折の骨片摘出術を実施した競走馬 214 頭を回顧的に抽出した。メドミジン (to effect) およびミダゾラム (0.02 mg/kg) による鎮静後, TG 群 (n=91) はチオペンタール (4.0 mg/kg) - GGE (100 mg/kg) により, PK 群 (n=123) はプロポフォール (1.0 mg/kg) - ケタミン (1.0 mg/kg) により, それぞれ麻酔導入した。麻酔維持には, セボフルラン吸入麻酔およびメドミジン持続静脈内投与を用いた。導入および覚醒の質, セボフルラン必要量, 循環機能, 覚醒時の特性を評価した。倒馬グレード (中央値, 範囲) は, 両群とも G5 (G2-5) で有意差は認められなかった。終末呼気セボフルラン濃度 (平均値 ± 標準偏差) は, 両群とも 2.4 ± 0.2% で有意差は認められなかった。平均動脈圧を 70 mmHg 以上に維持するために必要な平均ドブタミン投与速度は, TG 群 (0.73 ± 0.32 μg/kg/min) に比較して PK 群 (0.47 ± 0.24 μg/kg/min) は有意に低値を示した。覚醒グレードは, TG 群 [G4 (G2-5)] に比較して PK 群 [G5 (G2-5)] は有意に優れていた。サラブレッド種競走馬において, PK および TG いずれにお

いても同等の安全な導入が得られた。また、PK 導入法により、平均動脈圧を 70 mmHg 以上に維持するためのドブタミン必要量を軽減できただけでなく、覚醒所見発現時間は短縮し、覚醒の質は向上した。したがって、サラブレッド種競走馬への短時間麻酔において、TG 導入法に比べて PK 導入法の方が望ましいと考えられた。

対州馬保全に向けた島外対州馬と島内対州馬の分子遺伝学的調査——手塚あゆみ¹、高須正規²、戸崎晃明^{2,3}、永野 惇¹ (¹龍谷大学農学部, ²岐阜大学応用生物科学部, ³競走馬理化学研究所) …………… 33

対州馬は日本の在来馬であり、対馬島内で現在 41 頭のみが保護されている。個体数が極めて少ないことから、遺伝的多様性が非常に低くなっていることが推察され、遺伝的多様性の調査が急務となっている。対州馬が 1980 年代中ごろに島外に移動された、とする文献が残っており、対馬島外に対州馬とされる由来不明個体が複数存在している。しかし、それらは血統書を持たず、遺伝的構成が不明瞭なため、島内の対州馬との交配に利用されていない。本研究では、ddRAD-seq 法を用いて、島外で飼育されている対州馬 18 個体の遺伝的構成を調査した。これに、対馬島内の対州馬、その他の日本の在来馬 4 種、およびかつて対州馬に一時的に交雑したとされるアングロアラブ 1 種に関する過去の DNA 配列情報を合わせてクラスター解析を行ったところ、島外対州馬は島内対州馬と同じクラスター内に含まれた。一方で、島内・島外に関わらず、調査した全対州馬個体は他の日本在来馬およびアングロアラブと明瞭に区別され、アングロアラブとの交雑の影響はほとんど残っていないものと考えられる。品種特有の一塩基多型 (SNPs) をどのように共有するかを確かめたところ、対州馬特有の SNPs のうち、島外の個体でみられる 258 SNPs は、島内の個体でみられる 263 SNPs にすべて含まれていた。このことから、本研究で調査した島外の対州馬は、遺伝的には島内の対州馬とほぼ変わらず、集団維持計画に利用できるものと考え

られる。さらに、遺伝的多様性の指標としてヘテロ接合度を計算したところ、島内の対州馬だけの場合よりも、島外の対州馬を加えた場合のほうが、ヘテロ接合度がわずかにだが高くなった。調査された島外対州馬の多くが馬齢的に交配計画に利用可能な状態であることを踏まえると交配計画に利用することは遺伝的多様性の改善に有効であろうと考えられる。また、実際に交配計画に利用する場合、家系図の有無が重要な点になる。そこで、IBD を用いて家系図の再構築を試したところ、片親一致の兄弟馬が複数存在する場合には、家系図再構築に成功した。島外個体の計画交配への活用は、我が国の対州馬の品種保全のために有効かつ現実的な解決策の 1 つである。

短 報

サラブレッドにおける喉頭蓋エンタラップメント：サラブレッドにおける喉頭蓋エンタラップメントの外科的修正と術後合併症 12 例 (2009 ~ 2015 年) —— Sang-Kyu LEE^{1,2}, Inhyung LEE¹ (¹College of Veterinary Medicine, Seoul National University, ²KRA Equine Hospital, Korea Racing Authority) …………… 41

韓国馬事会馬診療所にて、サラブレッドの競走馬 12 頭が喉頭蓋エンタラップメントと診断された。外科的修正の 4 種の手法 (経鼻的フックビストリー、経口的アンシールドフックビストリー、経鼻的シールドフックビストリー、および経内視鏡的レーザー法) を利用し、喉頭蓋エンタラップメントの治療を行った。11 例は外科手技により最終的に回復し、1 例に再発が認められた。外科的修正に関連した合併症は 5 例に発生した。その内訳は、重度鼻腔裂傷および出血 (n=1)、喉頭蓋裂傷 (n=1)、喉頭蓋先端熱傷 (n=2)、および中等度鼻腔裂傷 (n=1) であった。術中の合併症は症例の約 41.7% に生じた。このように、喉頭蓋エンタラップメントの修正を目的として外科手技を選択する場合は、手術合併症の可能性を十分に考慮すべきである。

臨床委員会 DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では、過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習のDVDを販売しています。

<お申し込み方法>

以下の申込用紙をご利用いただくか、メールで事務局までお申し込みください。

<価格および代金のお支払い方法>

価格は1セット**3,000円**（税込）です。

お申し込み後、折り返し合計代金をご連絡いたしますので、ご確認の上、下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後、宅配便にてお送りいたします。なお、お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座 記号番号：00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行（9900）〇一九（ゼロイチキュウ）店 当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマカカクカイ）

----- キリトリセン -----

申込用紙

ご希望のDVDと枚数	(1) 2009年（第22回学術集会）	Dr. Brooks	眼科	() セット
	(2) 2010年（第23回学術集会）	Dr. Richardson	整形外科	() セット
	(3) 2011年（第24回学術集会）	Dr. LeBlanc	繁殖	() セット
	(4) 2012年（第25回学術集会）	Dr. Dyson	跛行診断	() セット
	(5) 2013年（第26回学術集会）	Dr. White	急性腹症	() セット
	(6) 2014年（第27回学術集会）	Dr. Scott	装蹄	() セット
	(7) 2015年	Dr. Mama & Steffey	麻酔	() セット
	(8) 2016年（第29回学術集会）	Dr. Ducharme	呼吸器	() セット
	(9) 2017年（第30回学術集会）	Dr. Hyde	歯科	() セット
お名前				
ご送付先住所				
ご所属				
電話番号				
メールアドレス				

連絡先： 日本ウマ科学会事務局

FAX：0285-44-5676

e-mail： e-office@equinst.go.jp

住所：〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4 JRA競走馬総合研究所

協賛団体名

団体名	〒	住所
日本中央競馬会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1 六本木ヒルズゲートタワー
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル

賛助会員名簿

(五十音順)

会員名	〒	住所
(株)アイベック	170-0002	東京都豊島区巢鴨 1-24-12 アーバンポイント巢鴨 4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	057-0171	北海道浦河郡浦河町西舎 528
公益財団法人 競走馬理化学研究所	320-0851	栃木県宇都宮市鶴田町 1731-2
JRA システムサービス(株)	135-0034	東京都江東区永代 1-14-5 永代ダイヤビル 7F
JRA ファシリティーズ(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀 3-19-9 ジオ八丁堀
公益財団法人 ジャパン・スタッドブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 6F
公益財団法人 全国競馬・畜産振興会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
公益社団法人 全国乗馬倶楽部振興協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 5F
中央競馬馬主相互会	105-0004	東京都港区新橋 4-7-26 東洋海事ビル 3F
DS ファーマアニマルヘルス(株)	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目 5-7 大阪丸紅ビル 10 階
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町 9-2221-1
公益社団法人 日本装削蹄協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 7F
一般財団法人 日本中央競馬会弘済会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1 六本木ヒルズゲートタワー 9F
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 7F
公益社団法人 日本馬術連盟	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 6F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷 2-27-18

Hippophile 投稿に関する基準

(2013年4月1日一部改定)

- ① 本誌の投稿は、Hippophile 投稿規程（以下「規程」という。）に基づくことを基本とする。
- ② この基準は、投稿者が投稿しやすいよう投稿分野ごとに細目を定めたものである。
- ③ 原稿を本誌の目的に沿ったものにするため、1～3名の審査員により審査を行い、事務局（(株)アイベック）を通じて投稿者と調整を行う。審査員の指摘を受けた投稿者は速やかに事務局に回答するものとする。その目的は、多種多様な本学会会員に対し、解りやすく美しい文章で、かつ投稿者の真意が正確に伝わる記事にすることにある。
編集委員（長）および審査員は、掲載の可否にあたっては、内容が特に営利目的でないもの、あるいは偏った個人批判、地域批判、団体批判を含まないものであることに留意する。
- ④ 本誌は、図表のカラー化を取り入れていることから、良好なピントや色彩を求める。
- ⑤ 本誌は、各号のページ数を刷上り約40ページとするため、投稿ページ数に制限を設ける。ただし、やむを得ない場合は、投稿者と協議のうえ、編集委員長がページ数を決定する。
- ⑥ 図は、写真を含めて図と称し、番号を付け、タイトルと説明文を付記することとする。その大きさは縦6.0 cm × 横8.5 cm とするが、説明文のスペースの関係から図1枚につき縦約7 cm 取ることにする。ページ数の調整の関係で編集委員（長）の一任により図のサイズを決定することがある。
- ⑦ 投稿者は顔写真（カラー）と略歴（150字程度）を添付することとする。
- ⑧ 刷上り最大24字×42行×2段＝2,016字の字数が1ページに印刷可能であり、これを目安に投稿することとする。
- ⑨ 図1枚の占めるスペースの字数は約168字となる。
- ⑩ 表にはタイトルと説明文のほか、必要に応じて注釈・解説文を添付することとし、表の大きさは、ページ数を考慮し、審査員と編集委員（長）が協議のうえ決定する。
- ⑪ 投稿者に原稿料（1ページにつき3千円）を支払う。ただし、原則として研究論文や施設紹介には支払わない。原稿料は、刷上りのページ数により算出し、ページ半分に満たない部分は切捨てとする。ただし、5ページ相当の原稿料（1万5千円）を上限とする。
- ⑫ 投稿者は、原稿内容により、以下の各コーナーの分類について要望又は指定することができる。

総説：

【ウマの科学的分野における研究の総括と展望】

- ① 文献展望を主体とし、刷上りは図表を含めて10ページ以内程度とする。

科学論文・一般学術論文：

【ウマ科学に貢献する未発表・他の学術誌に未掲載の和文論文】

- ① オリジナリティーの高いもの。

- ② 科学論文は、研究目的、材料・方法、成績・結果、考察、纏めが適切に記述されている自然科学の論文とする。
- ③ 一般学術論文は、自然科学に準ずるが、馬の文化、経済学、芸術、歴史などの人文科学の論文とする。
- ④ 刷上りのページ数は図表を含めて10～12ページ以内程度とする。
- ⑤ 引用文献の書き方はJESの投稿規程に準ずる。本文中のナンバーリングは上付きとし、引用文献順に掲載する。但し、著者名の記載は1名あるいは2名までとし、3名以上の場合は代表者1名を記載し「その他、あるいは et al.」として記載する。

馬事往来：

【馬との関わりについての提言、レポート、エッセイなど】

- ① 馬の文化や科学の実態を会員が相互に理解しておく必要性のあるもの。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

馬事資料：

【馬に関連する資料の掲載】

- ① 日本の馬事資料として保存しておく必要性のある内容のものを掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

特別記事：

【馬に関連する競技会やイベント、利用実態などの記事】

- ① 馬に関係する各種催し物や活動状況などを紹介。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

馬事施設紹介：

【馬の文化・科学に関わる施設の紹介】

- ① 日本の馬事文化、研究、教育、乗馬等に関わりのある施設などの紹介記事。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

学術集会記事：

【馬に関する学術集会における講演内容等の掲載】

- ① 本学会の学術集会等を主体に掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

関連研究会記事、その他：

- ① 規程に準じて取り扱う。
- ② 刷上りのページ数は1～2ページとする。
- ③ いずれのコーナーにも該当しないものにあつては、編集委員長が新たにコーナーを設けることができる。

投稿原稿送付先

Hippophile 編集事務局宛に e-mail もしくは郵送でデータを送付のこと。（投稿された原稿は返却しませんので予めご了承ください。）

e-mail: hippo@ipecc-pub.co.jp

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-12

(株)アイベック内 Hippophile 編集事務局

編集後記

令和になって最初のヒポファイルをお届けします。

来年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピック。とは思うものの、ボーっとしているうちに入場券の抽選販売の受付も終了しており、編集子は申し込みそびれてしまいました。すると今度は聖火ランナーの募集が始まりました。世間は開催1年前にして徐々に盛り上がっているようで、当方も少しその気になってきました。暑いなか走るのはしんどいので聖火ランナーには申し込みませんが、今秋に予定されているらしい先着順の受付で馬術競技の予選の入場券をゲットして、新装なった馬事公苑で是非観戦したいと考えています。

さて本号の馬事資料は池田収さんによる過去のオリンピックに参加した日本馬術選手団の記録の連載最終回です。テーマは1964年開催の東京オリンピック。今から55年前のできごとですが、新鮮な驚きと発見に満ちています。その準備状況の記録は、まさに現在オリンピック開催に関係している方々にとっては必読ともいえるでしょう。

馬事往来は江刺尚美さんによる地域に根ざした乗馬療育の活動報告です。馬産地北海道・浦河における乗馬療育の歴史は20年以上におよびます。乗馬による高齢者の介護予防という活動とその効果を紹介していただきましたが、彼の地の高齢者は幸せです。

馬事往来もう一編は、梶裕永さんによる輸血用のユニバーサルドナーの話です。馬の生産者にとっては、身近にユニバーサルドナーがいることが大きな安心につながります。生産地の関係者が本記事の情報を参考にいただければ幸いです。

特別記事として本誌の編集委員でもある三浦暁子さんに北海道をルーツとする馬具メーカー、ソメスサドル社について紹介していただきました。おしゃれな写真とともにお楽しみください。

(編集委員長 楠瀬 良)

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は5,000円(国内)です。

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

E-mail : e-office@equinst.go.jp

Hippophile, No. 77, 2019

2019年6月発行

<http://jses.equinst.go.jp/>

編集委員長：楠瀬 良

発行者：青木 修

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

郵便振替口座番号 00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキョウ)店

当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会(ニホンウマカガクカイ)

印刷者：株式会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-12

電話 03-5978-4067